月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.129



ハロウィンにあわせてあのキャラが衣装替え！
『英雄伝説 暁の軌跡』

ハロウィンといえばやっぱりあのお祭り！
も～っと集まれ！ファルコム学園

スウィンとナーディアに再び因縁が訪れる
創の軌跡 THE MISERABLE SINNERS

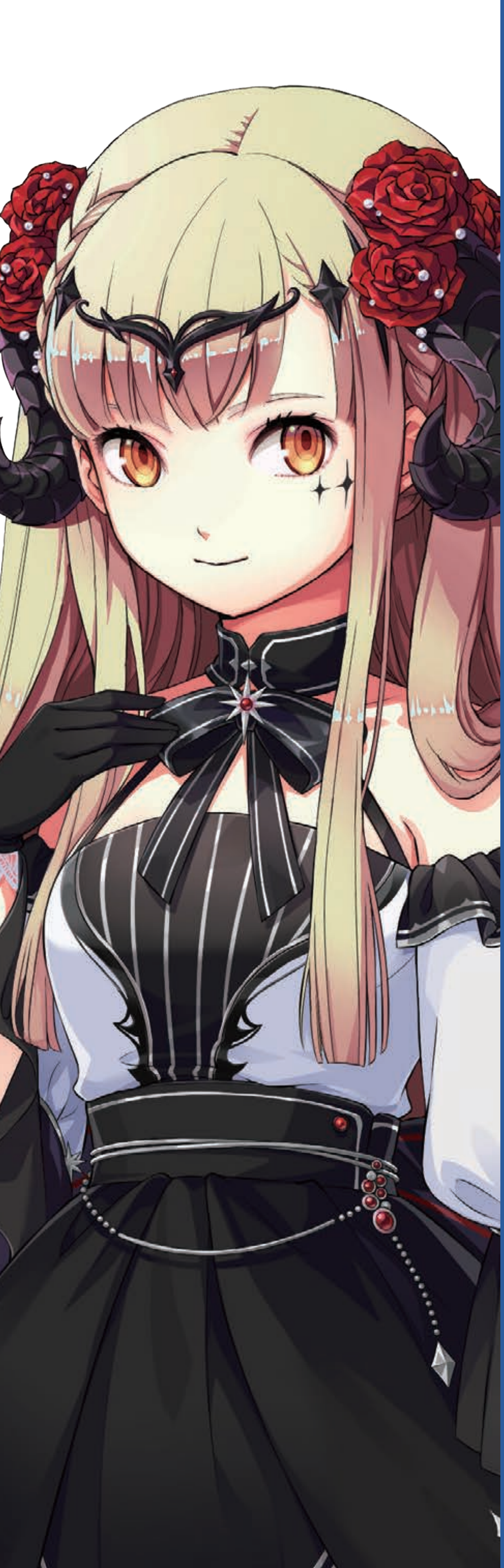
エステルとヨシュアの前に現れた待ち人とは
英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

冒険がより楽しくなる魅力満点のDLCアイテムが盛りだくさん！

英雄伝説 黎の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

アラミス中等部制服セット
価格 500円+税



フェリとカトルがアラミス中等部に入学したら…?をコンセプトにデザインされた制服２点セット

サングラスセット
価格 200円+税



大人の魅力溢れる【クラシック】、カラフルな光沢の【スポーツ】、バイカー用の【バイカーズ】。３種類の異なるサングラスをセットに。

メガネセット
価格 200円+税



セルフレームの【イージーマーブル】、理知的な【インテリジェンス】、クールな【アーバンスクウェア】。３種類の異なる眼鏡をセットに。

リュックセット
価格 200円+税



扱いやすい【カジュアル】、ぬいぐるみ型の【ジェントルベア】、クルガ戦士団愛用の【クルガサバイバル】。3種類のリュックをセットに。

強化マスクセット
価格 200円+税



【ブラック】【レッド】【シルバー】【ミリタリー】とカラーリングの異なる４種類の強化マスクをセットに。

Xiphaメタルカバーセット･キャラデザイン
価格 300円+税



メインキャラのイラストをあしらった戦術オーブメント《Xipha》用のメタルカバー８点セット

無料



無料お試しセットVol.2
無料

ゲームプレイに役立つアイテムを収録した､お得な無料セットです。

●Sボムの果実×１　●ゼラムパウダー×１

無料お試しセットVol.3
無料

ゲームプレイに役立つアイテムを収録した､お得な無料セットです。

●命の雫　●力の雫　●守の雫
●魔の雫　●霊の雫　×各１

ホロウコアVoice：ジュディス（CV：日笠陽子）
価格 200円+税



戦術オーブメント《Xipha》のシステムボイスをジュディス・ランスターに変更可能な DLC。いつでもどこでも、導力映画のトップ女優が華やかな声色であなたをサポート！

ホロウコア Voice：吼天獅子（CV：大塚明夫）
価格 200円+税



戦術オーブメント《Xipha》のシステムボイスを七耀教会の《吼天獅子》に変更可能な DLC。いつでもどこでも、伝説の守護騎士がボイスであなたをサポート！

2周目がより楽しくなる DLC情報を一挙大紹介！

カルバード共和国を舞台とした『軌跡』シリーズ最新作『黎の軌跡』。発売から１ヶ月が経ち、そろそろクリアしたというユーザーも多いはず。そこで今回は、２周目以降がより楽しくなる 10 月配信の DLC 情報を一挙大紹介！『黎の軌跡』をすみずみまで遊びつくそう。

タイトル：英雄伝説 黎の軌跡　**発売中**
ジャンル：ストーリー RPG　**対応機種**：PlayStation4　**プレイ人数**：1人
販売価格：[通常版] 7,800 円（税抜）
[SPRIGGAN Edition] 9,800 円（税抜）［ダウンロード版］7,500 円（税抜）
CERO レーティング：C



オリジナル水着　価格 各500円+税



フェリ
フェリ専用のスポーティな水着。サンバイザー付きの上着タイプにも変更可能。



アーロン
アーロン専用の派手めな男性水着。サングラスがセットになった上着タイプにも変更可能。



リゼット
大人の魅力を引き出す、リゼット専用の水着。涼しげな雰囲気の上着タイプにも変更可能。



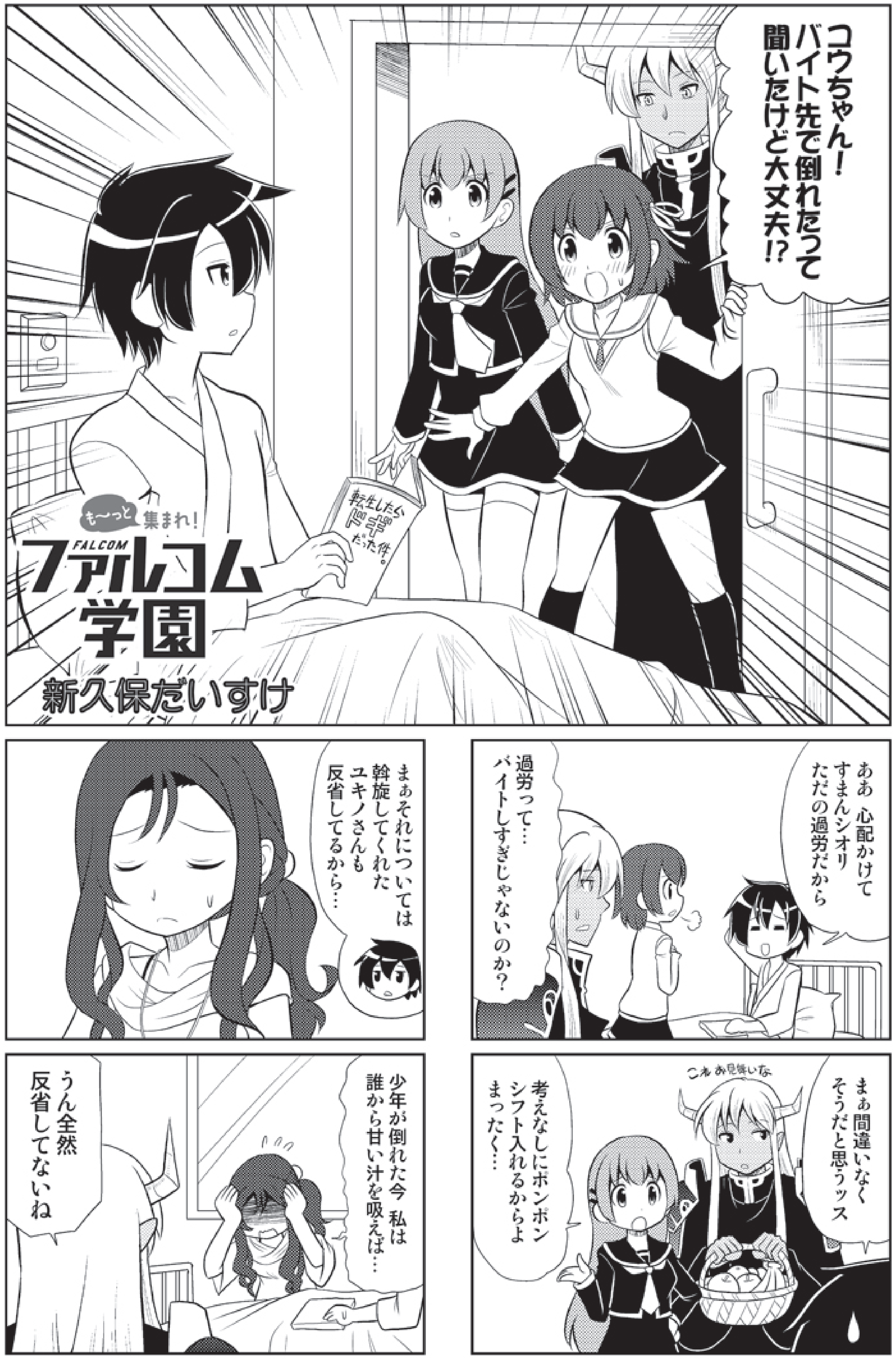
カトル
機能性を重視したカトル専用の水着。上着タイプにも変更可能。



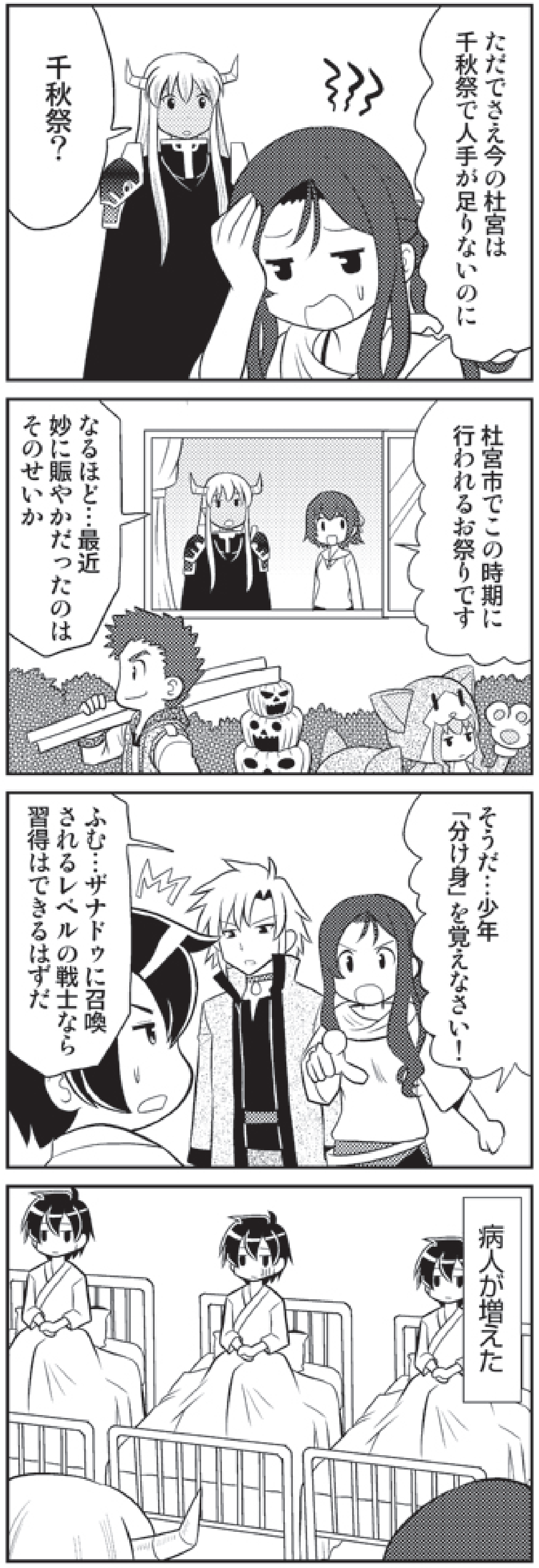
ジュディス
ジュディス専用の大胆で情熱的な水着。ゴージャスな上着タイプにも変更可能。



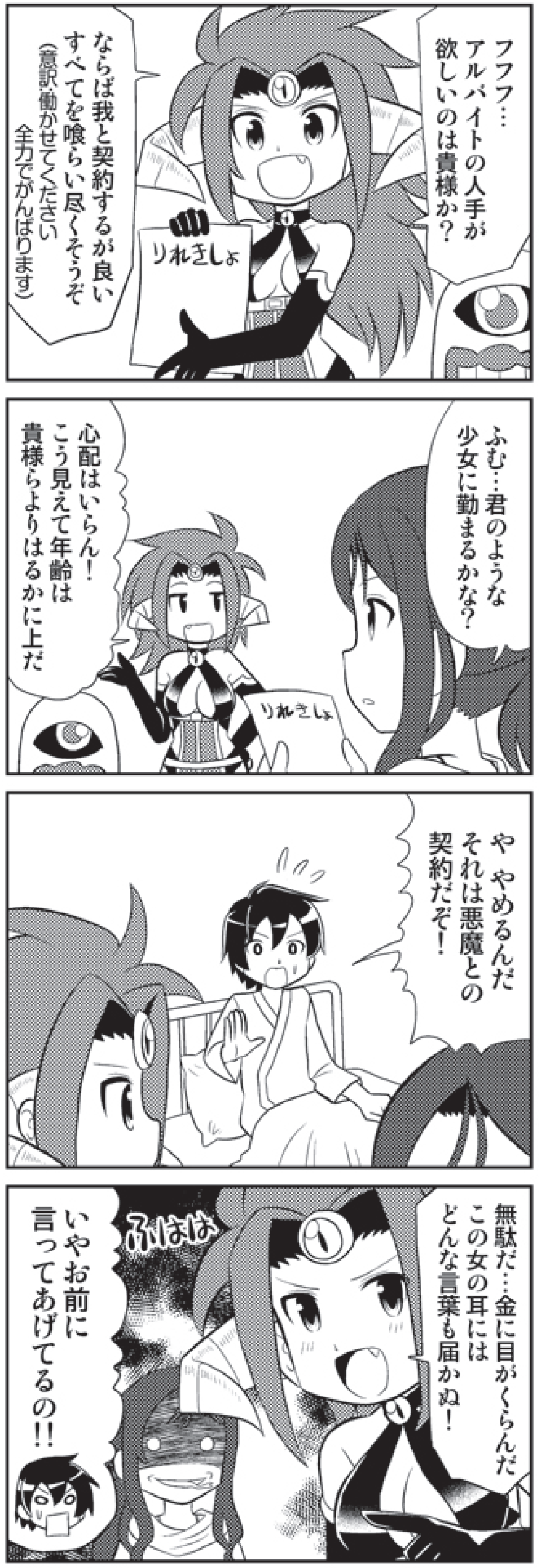
ベルガルド
ベルガルド専用のワイルドな水着。獅子のマークが印象的な上着タイプにも変更可能。



千秋祭と人手



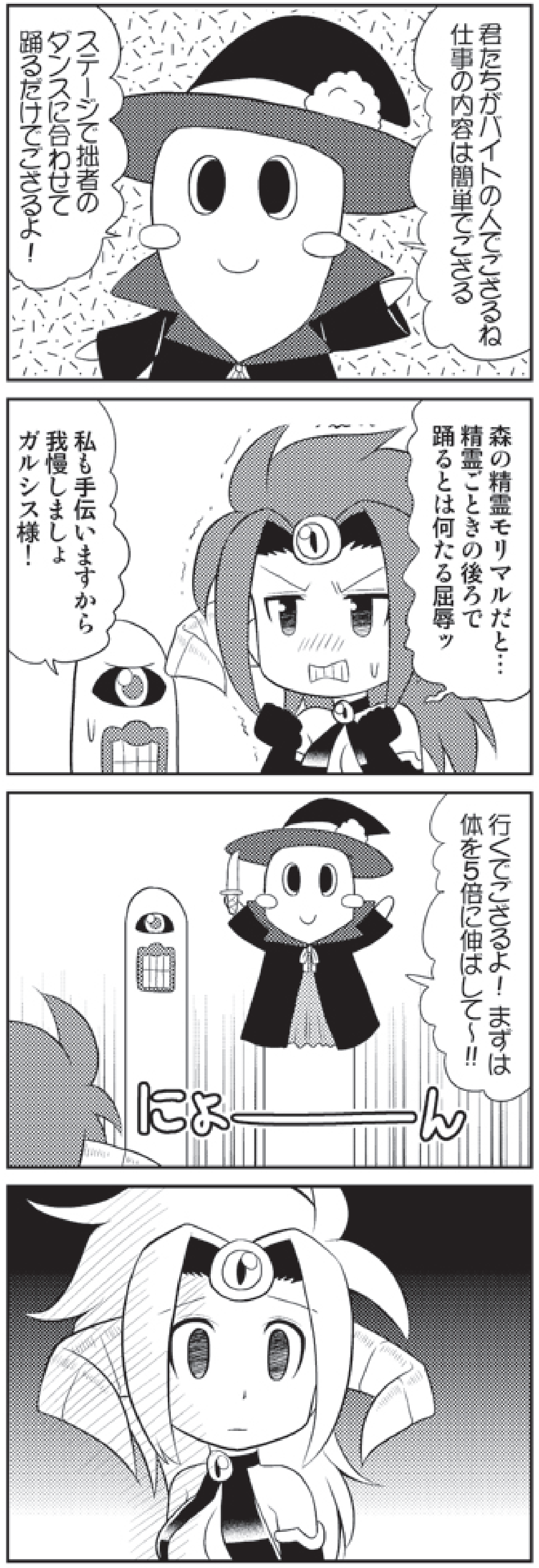
悪魔の契約



ちょっと待って



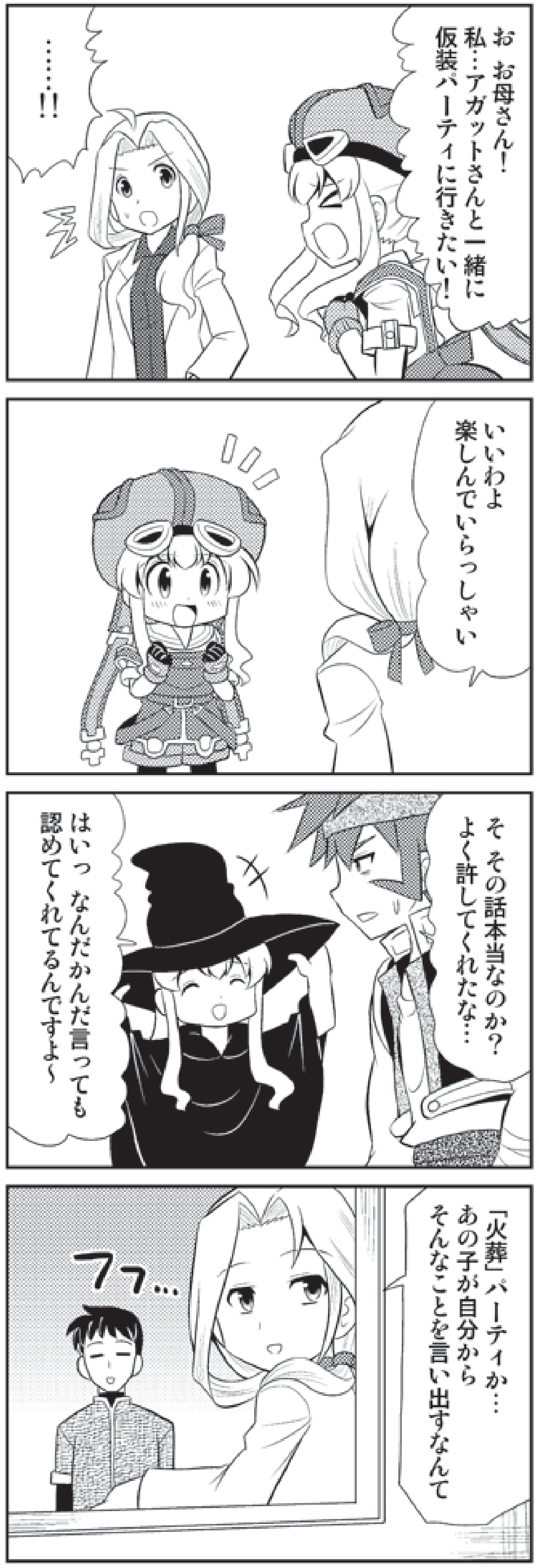
簡単な仕事



新しい文化



仮装パーティ



怪人たちのハロウィン



リンゴとハロウィン



お菓子と占い



宣戦布告



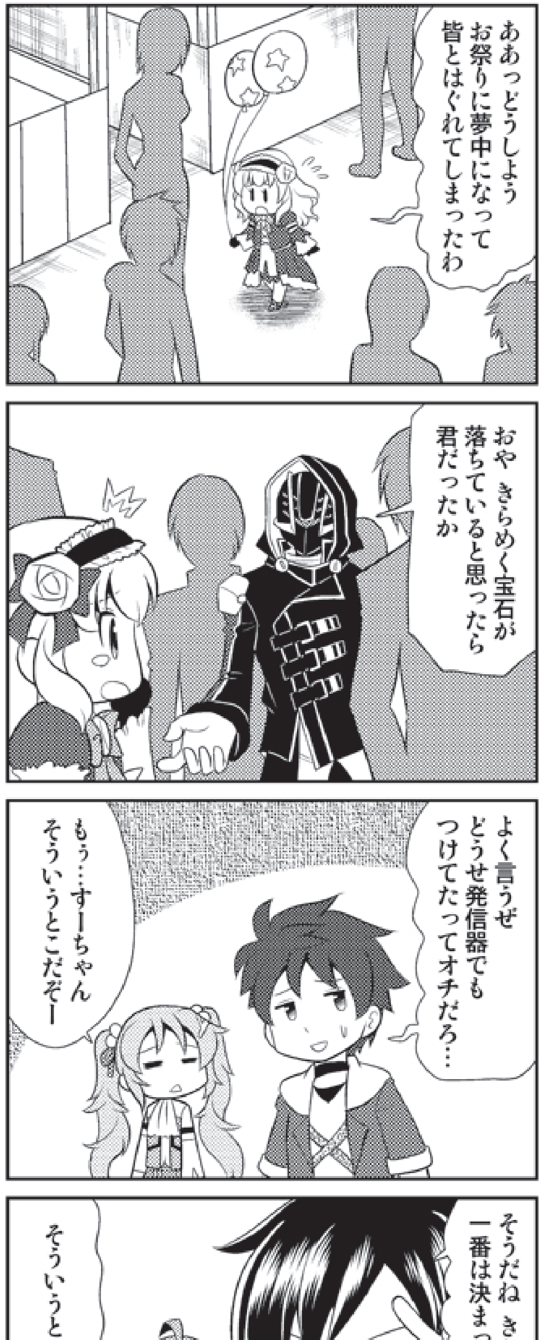
ダルク先生のカボチャ教室



かんおけノート

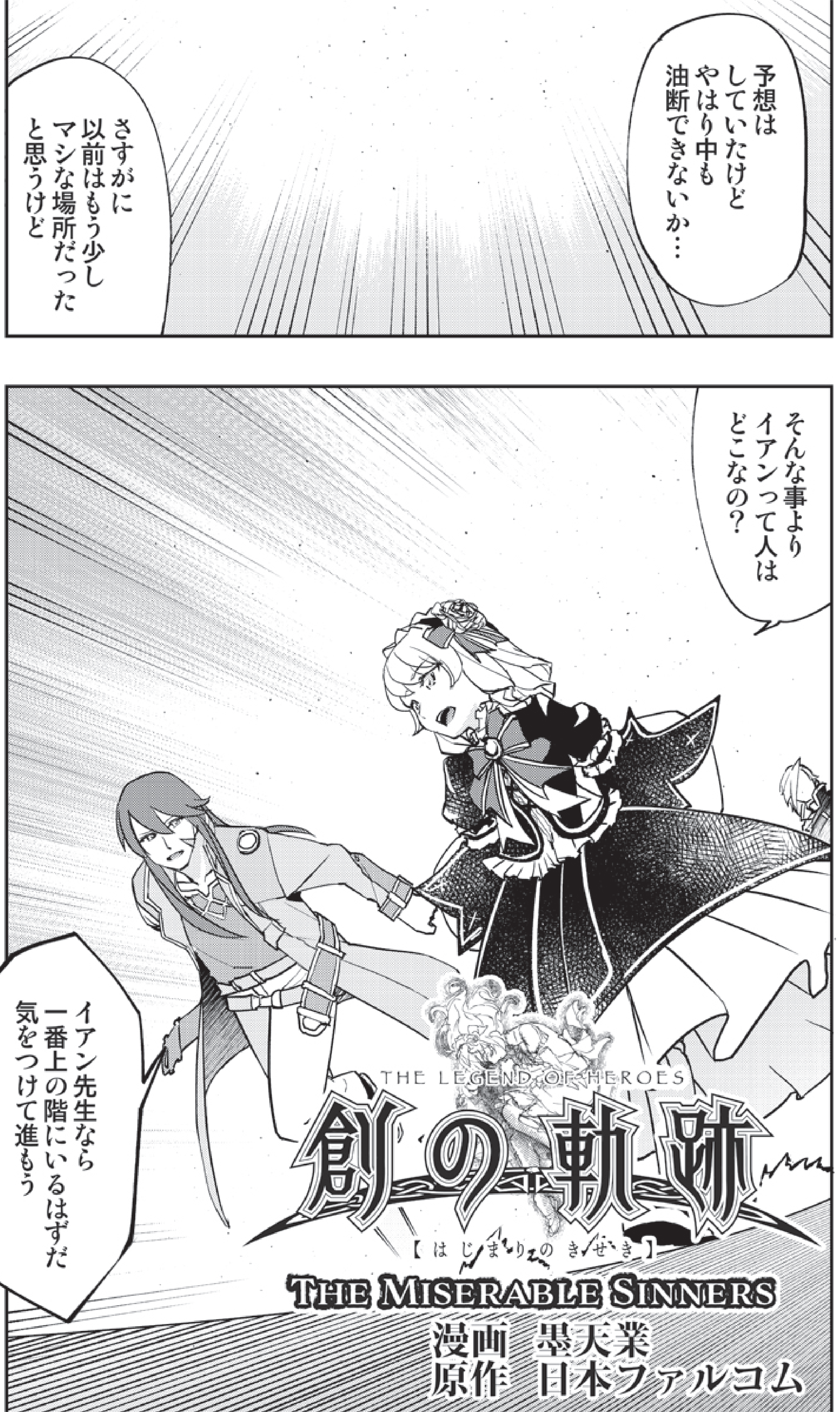


そういうとこ



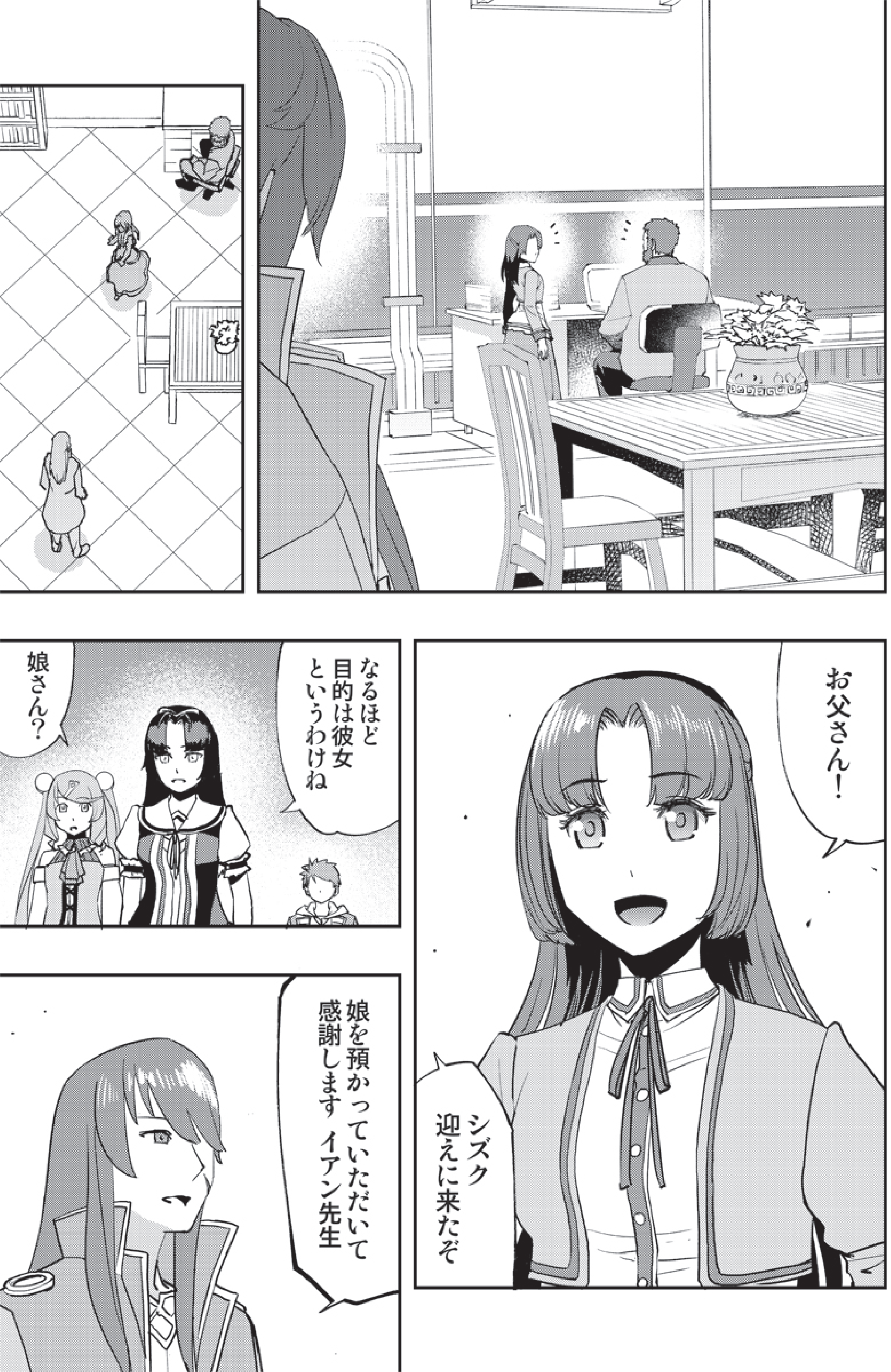
ハロウィンの誘惑




予想はしていたけどやはり中も油断できないか…
さすがに以前はもう少しマシな場所だったと思うけど
そんな事よりイアンって人はどこなの？
イアン先生なら一番上の階にいるはずだ気をつけて進もう
THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】
THE MISERABLE SINNERS
漫画 墨天業
原作 日本ファルコム


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円＋税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©2020 FIELD-Y
発行：フィールドワイ フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
発売：メディアパル ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks



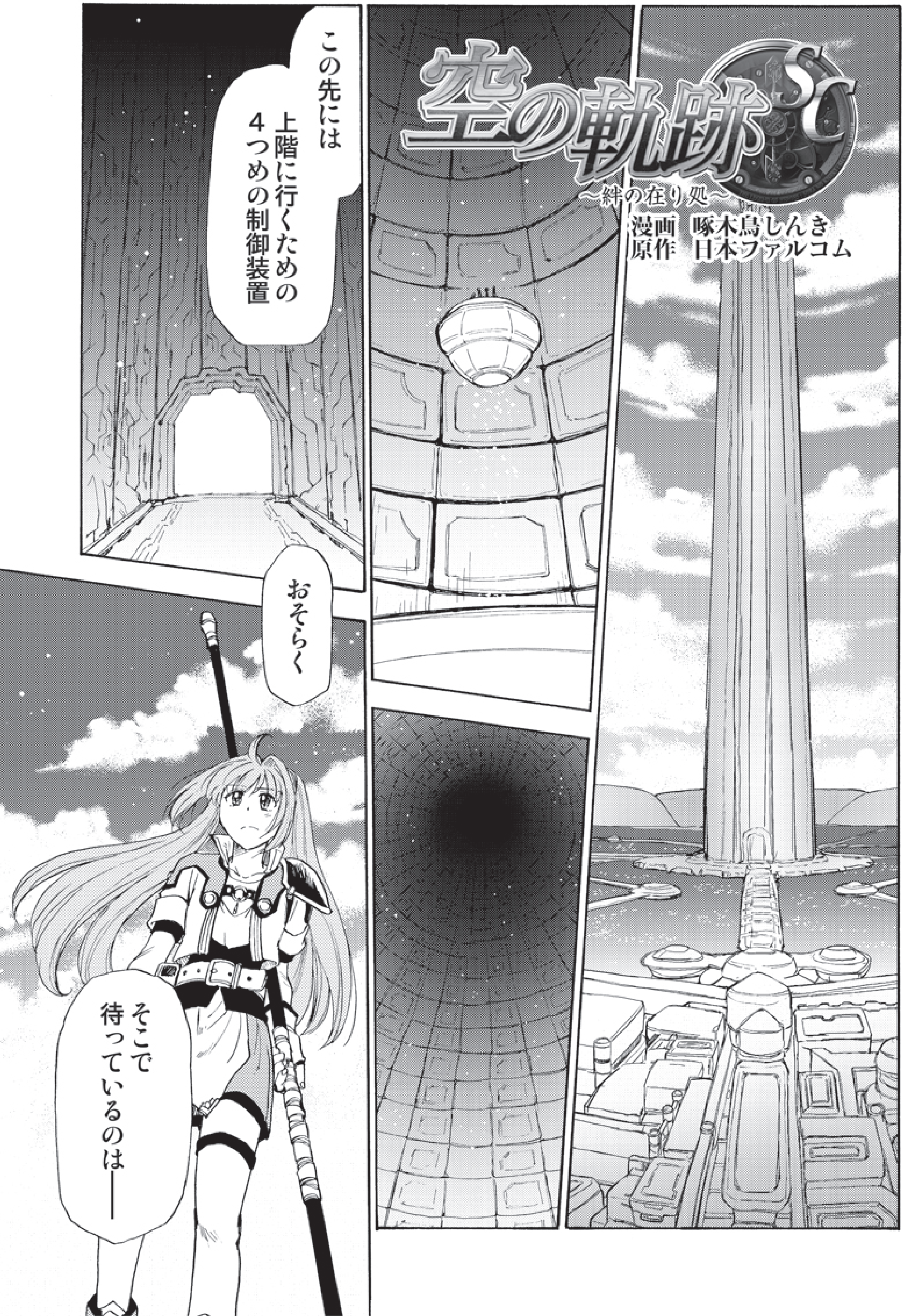

お父さん！
なるほど目的は彼女というわけね
娘さん？
シズク迎えに来たぞ
娘を預かっていただいて感謝します イアン先生


占領されたのが
予想より早くてね
来てくれて助かったよ
アリオス君
知らない面々もいるようだが
ここにいては不自然な人間が
少なくないようだ
はじめまして
イアン・グリムウッド弁護士
ルーファス・アルバレアという
先程の質問だが
答えはすべて彼女にある
…君は?
私の名前は…
……
ラピス・
ローゼンベルクよ
そうか
そういうことか…!
では
さっきの言葉を
訂正しよう
よく来てくれた
君を待っていたよ
ラピス君
どうやら
今回は――
アタリ
みたいだね〜
ゴゴゴゴ

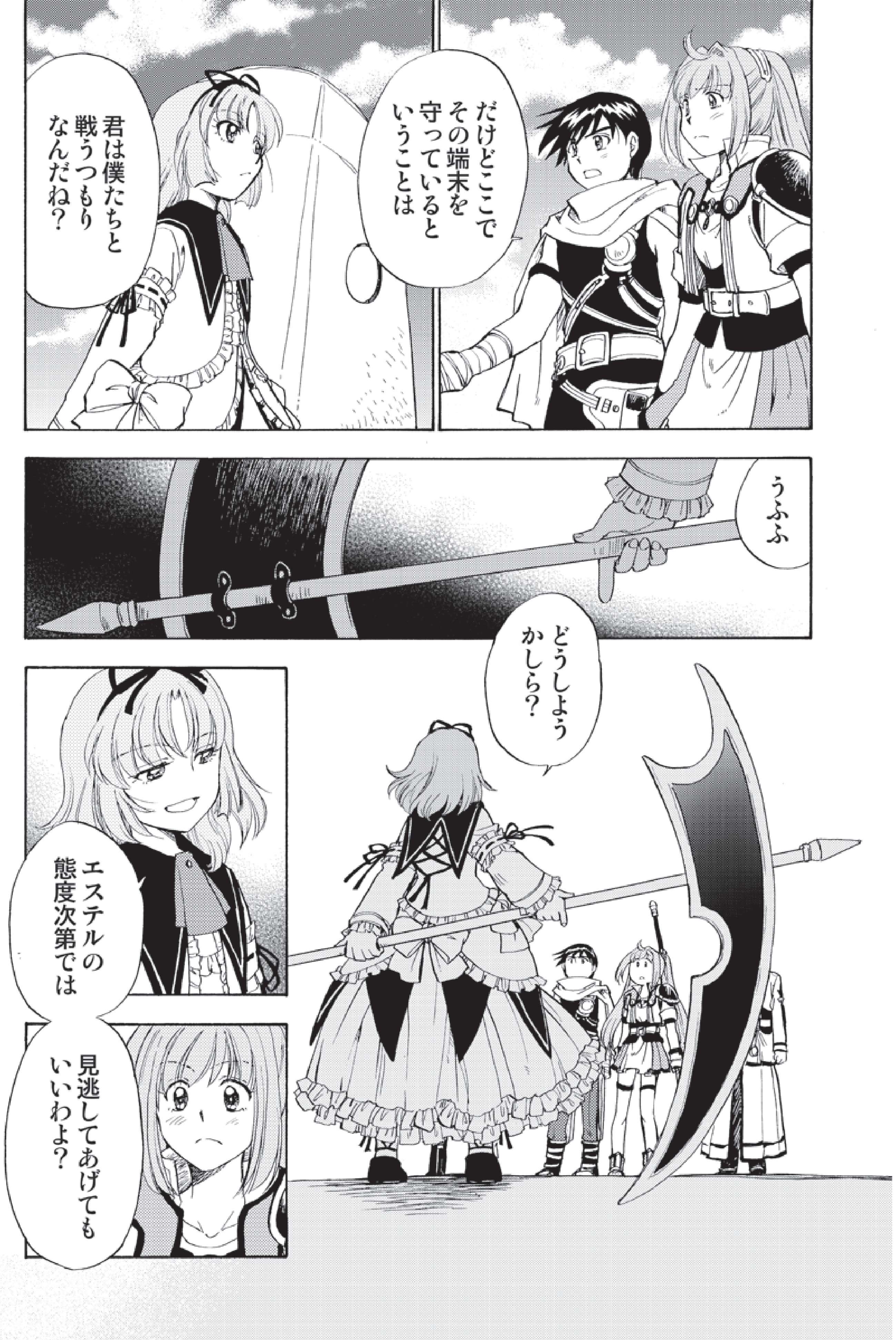

何事ですの!?
お父さん… あれは!?
シズク 廊下に下がっていろ
先生も避難を
どうやら落ち着いて話ができる状況ではないようだ
あれってまさか…
…エンペラーなの?
カラ
カラ…
オ
オ

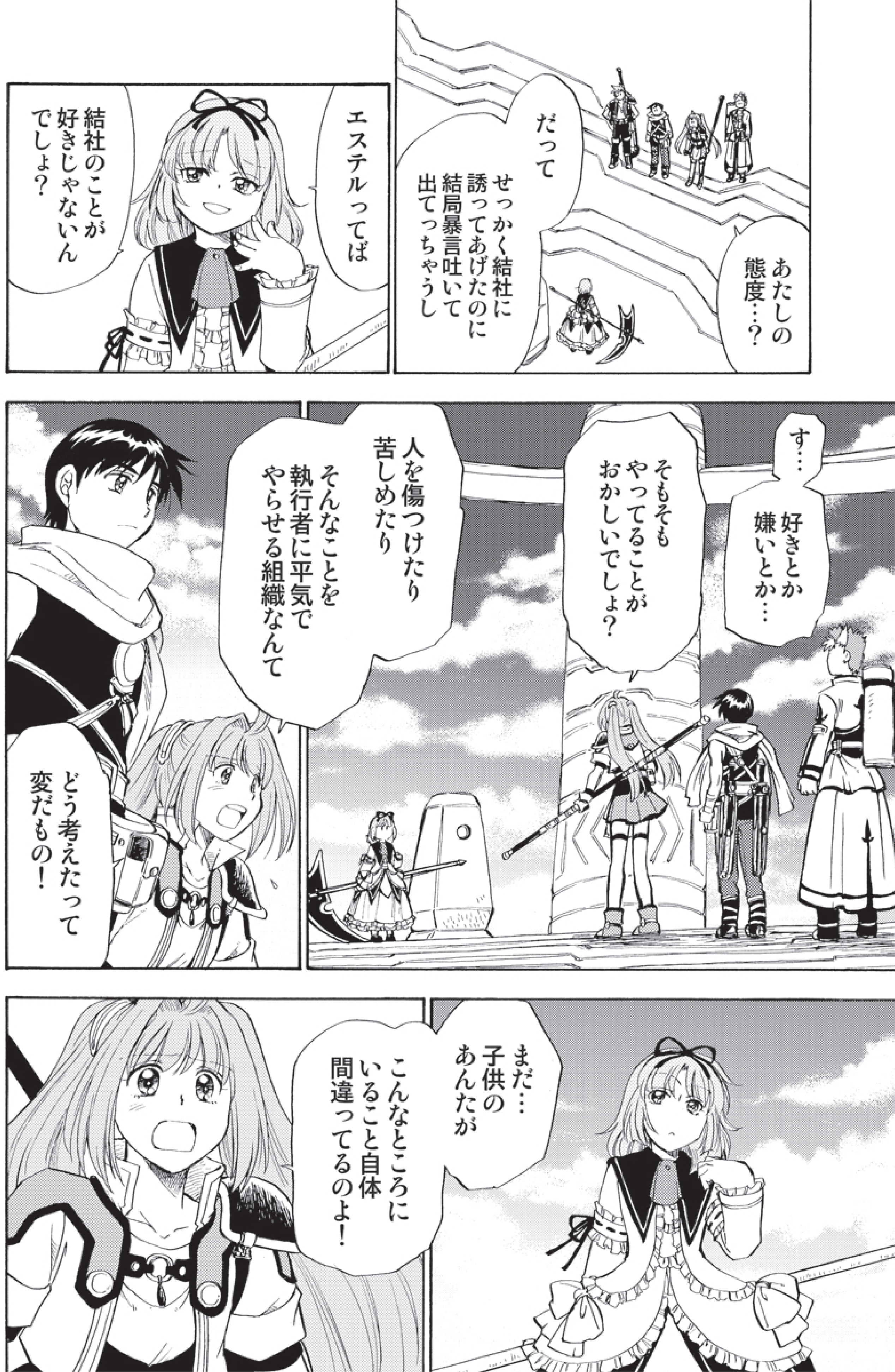

オ
ワレ…ハ…
オ
シナ…ヌ…
オ
オ
あの肩の形は…彼が使っていた古代遺物か？
それにしては…
噂にしか聞いた事はないけどあれはもしかすると古代遺物の暴走かもしれないわ
周囲のものも取り込んで歪んでしまった特異点のようなものよ！
ミツ…
ケ…タ…
もはや人格のほとんどが古代遺物に侵食され――
わずかに残った執念だけで行動しているようだな
こ こちらをすごく睨みつけていますけどアレあなた達の知り合いですの!?
非常に不本意ながらね
でもここで退治するしかない！

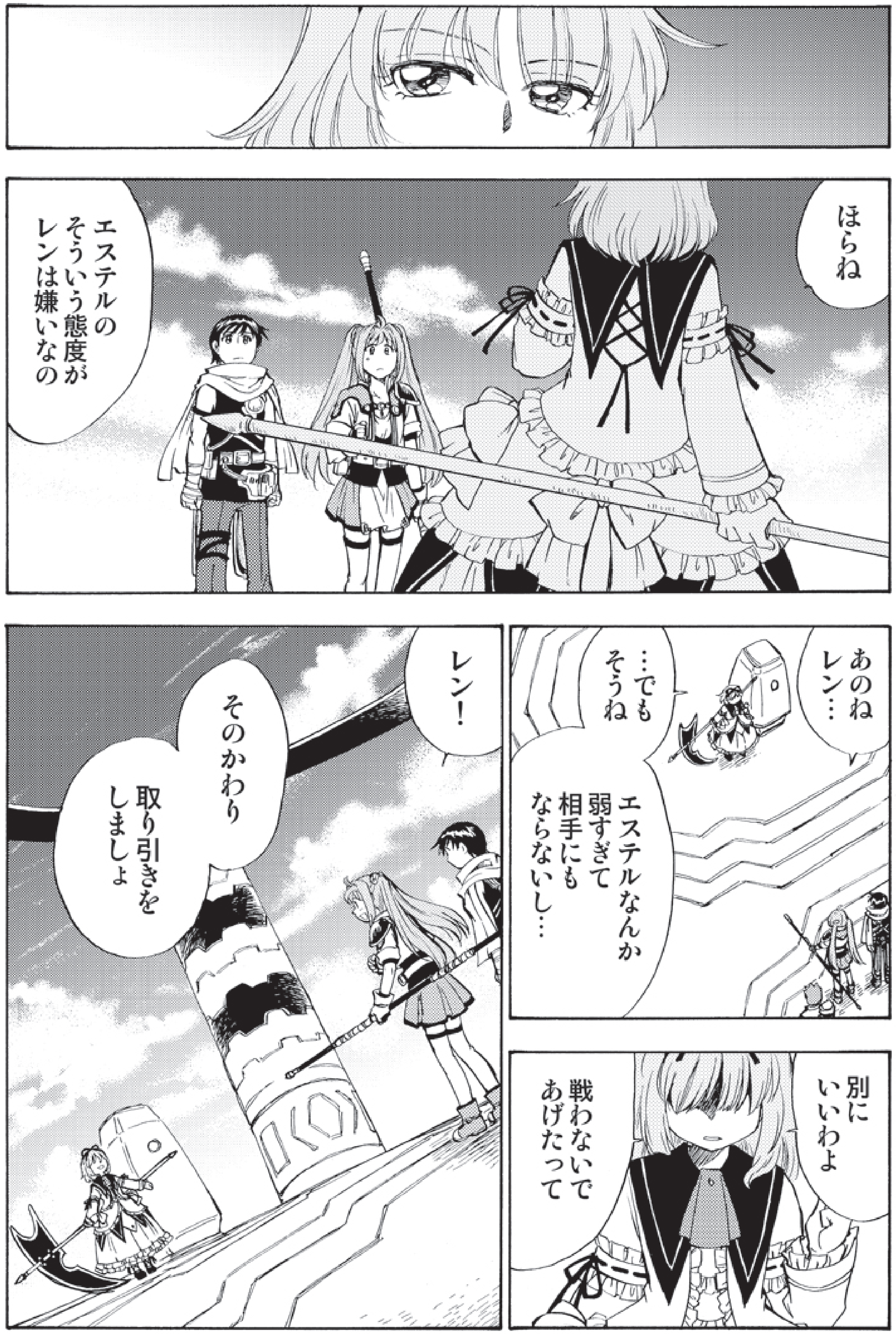

Fortsetzung folgt

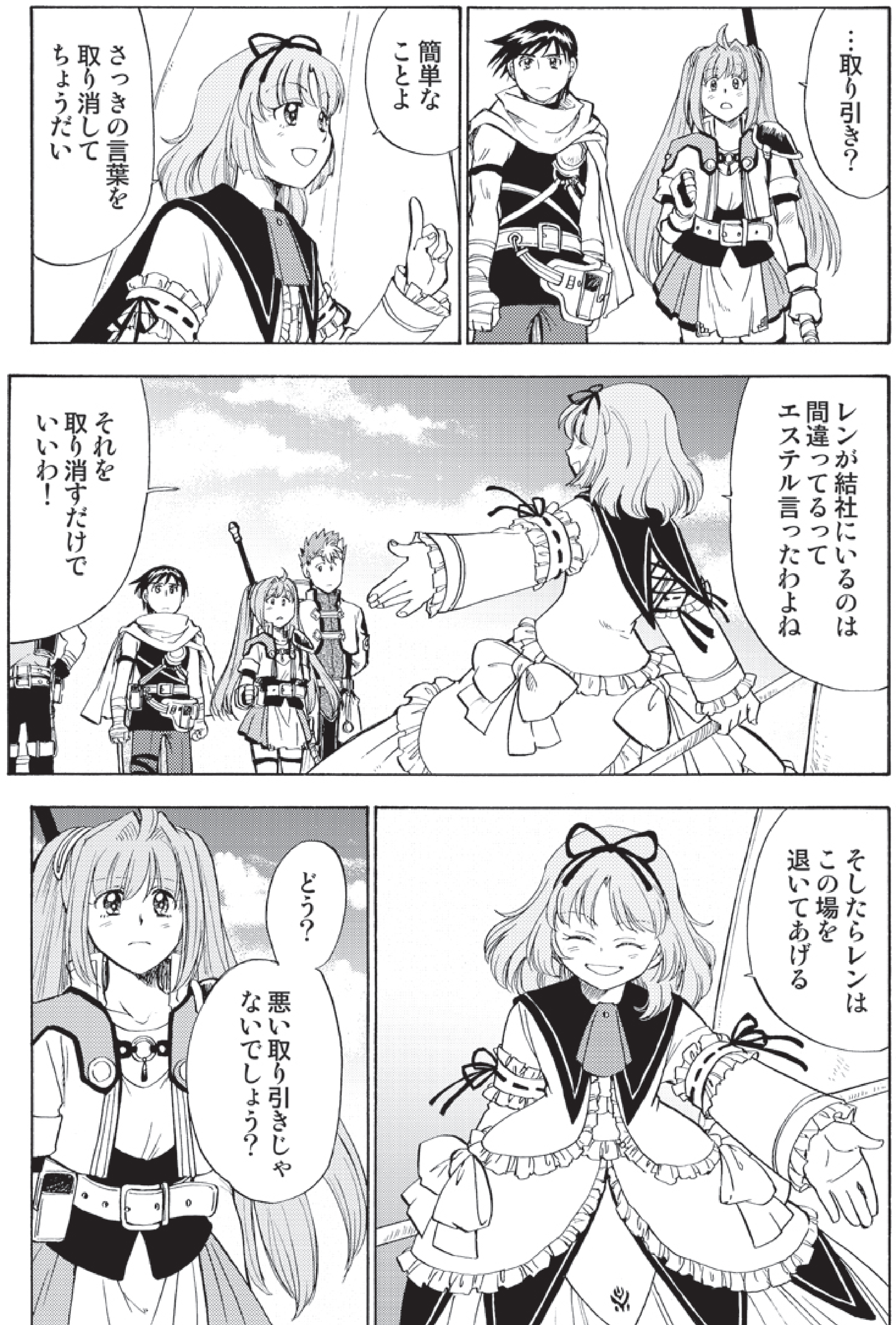

空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
この先には
上階に行くための
４つめの制御装置
おそらく
そこで
待っているのは――


英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円＋税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks


くすくす
やっぱりここまで来たわね
レン…
レンは信じていたわ
エステルとヨシュアがレンの所に来てくれるって

だけどここでその端末を守っているということは
君は僕たちと戦うつもりなんだね？
うふふ
どうしようかしら？
エステルの態度次第では
見逃してあげてもいいわよ？


あたしの態度…？
だって
せっかく結社に誘ってあげたのに結局暴言吐いて出てっちゃうし
エステルってば
結社のことが好きじゃないいんでしょ？
す…
好きとか嫌いとか…
そもそもやってることがおかしいでしょ？
人を傷つけたり苦しめたり
そんなことを執行者に平気でやらせる組織なんて
どう考えたって変だもの！
まだ…子供のあんたが
こんなところにいること自体間違ってるのよ！


ほらね
エステルのそういう態度がレンは嫌いなの
あのねレン…
…でもそうね
エステルなんか弱すぎて相手にもならないし…
別にいいわよ
戦わないであげたって
レン！
そのかわり
取り引きをしましょ


…取り引き？
簡単なことよ
さっきの言葉を取り消してちょうだい
レンが結社にいるのは間違ってるってエステル言ったわよね
それを取り消すだけでいいわ！
そしたらレンはこの場を退いてあげる
どう？
悪い取り引きじゃないでしょう？


…レン！
そんな取り引きは間違ってる！
たとえ望んだ言葉を引き出せても
本心が違っていたらなんの意味も…
ヨシュア
ここはあたしに任せてくれないかな
エステル…
…わかった
頼む！
ありがと！



運命に導かれるように再び出逢ったエステルとヨシュア。同時に、世に混乱を求める《身喰らう蛇》の秘密計画が実体となって姿を表す。リベール王国全土を巻き込む混沌の行方は!?緊迫の第5巻!

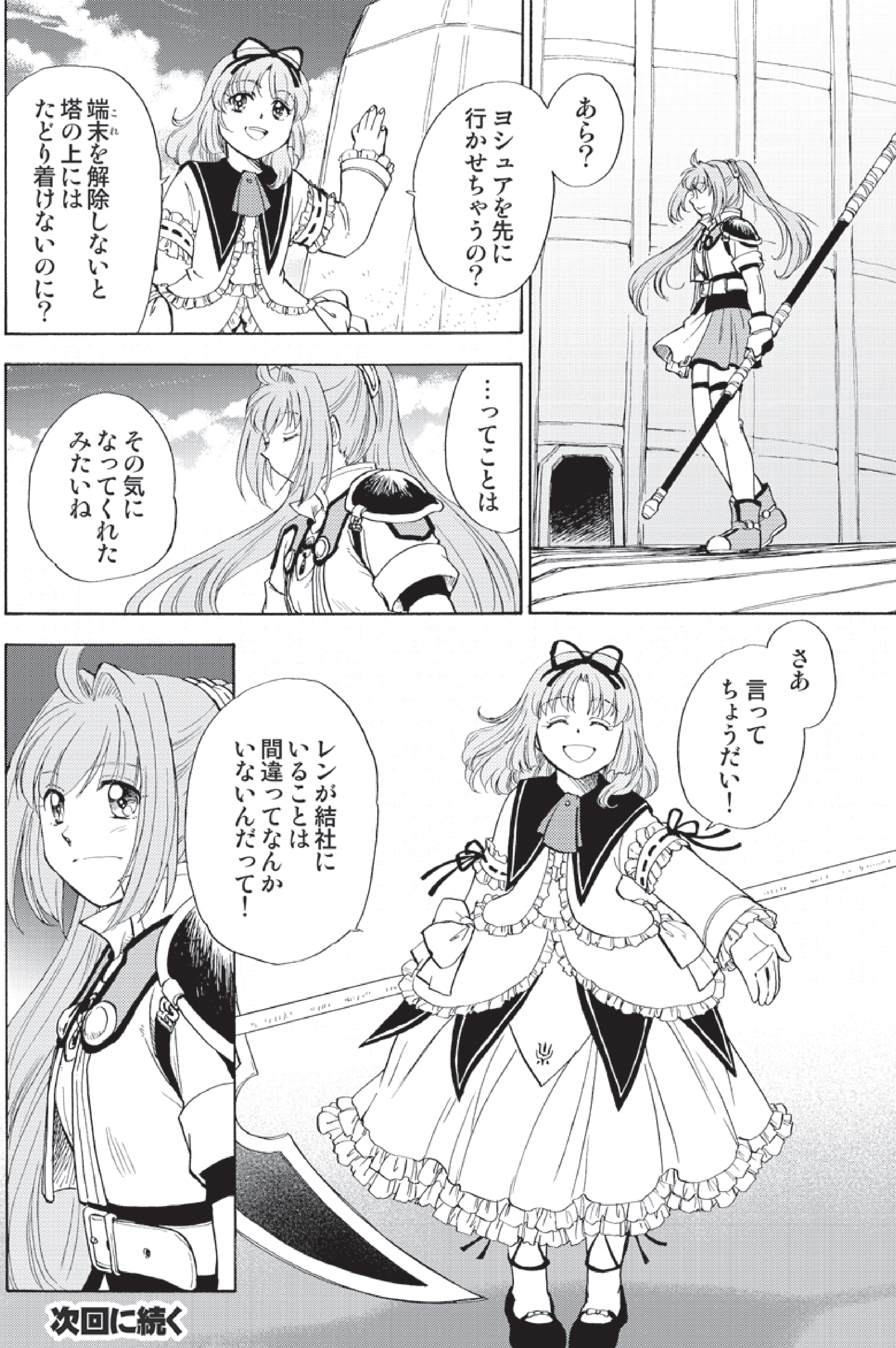
《結社》との決戦の刻、迫る！

英雄伝説 空の軌跡SC 5
ソラノキセキSC

著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム

定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3211-4

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『黎の軌跡』唯一の完全攻略本！『日本ファルコム公式 英雄伝説 黎の軌跡 ザ・コンプリートガイド』発売!!

『黎の軌跡』のすべてを網羅した唯一の完全攻略本が、ついに登場。本書でしか見ることができない各種計算式をはじめ、やり込み要素を取り逃さずに進められる攻略チャート、アチーブメントやシャードスキルなどの各種データを掲載しています。さらにL.G.C.アライメントによるゲーム終盤での共闘勢力の選択条件も公開。本書限定のジュディス専用衣装プロダクトコード「ゴールデンブラッドスーツ」、新久保だいすけ先生の描き下ろし4コマも必見です。






- ■書　名：日本ファルコム公式 英雄伝説 黎の軌跡 ザ・コンプリートガイド
- ■発売日：2021年11月20日
- ■定　価：2,300円（税別）
- ■仕　様：A5判、368ページ、左開き
- ■発　行：株式会社KADOKAWA Game Linkage
- ■発　売：株式会社KADOKAWA

2022年の壁掛けカレンダーは『英雄伝説 黎の軌跡』に決まり！

イラストレーター・エナミカツミ氏の通常版ジャケット用メインジビジュアルに加え、描き下ろしイラストやエンディングイラストを使用したB3サイズ（表紙＋12枚）の2022年壁掛けカレンダーが登場！



※制作中の画像です。実際と異なる場合がございます。

- ■商品名：黎の軌跡 壁掛けカレンダー2022
- ■サイズ：B3ヨコ（W515xH364mm）
- ■内　容：表紙＋12枚（2022年1月はじまり）
- ■価　格：￥2,750（税込）
- ■発売日：2021年12月20日
- ■商品紹介ページ：https://www.falcom.co.jp/archives/32106
- ■「ファルコムショップ」予約ページ：https://falcom.shop/products/detail/443

『創の軌跡』GraffArtシリーズから第2弾が登場！
今回はトールズ士官学院・旧Ⅶ組メンバーをフィーチャー！

『英雄伝説 創の軌跡』GraffArtキャラクターグッズ第2弾





- ■発売日（店舗）：11月27日（土）
- ■発売店舗：GraffArt Shop 池袋本店、なんば店、名古屋店
- ■店舗情報：http://graffartshop.athree3.com/
- ■eeo store通販予約ページ：https://eeo.today/store/101/title/search/product?parent_title_id=400

バルドゥークの怪人たちがハロウィン衣装になって登場！

「イースⅣ ハロウィンver.」ミニキャラグッズ





- ■発売店舗：GraffArt Shop 池袋本店、なんば店、名古屋店
- ■店舗情報：http://graffartshop.athree3.com/
- ■eeo store通販予約ページ：https://eeo.today/store/101/title/search/product?parent_title_id=138

10月の
新／衣装替えキャラクターをチェック！

THE LEGEND OF HEROES
暁の軌跡
アカツキノキセキ



ハロウィン・リーヴ

リーヴが久しぶりに衣装替えキャラクターとなって登場！ ハロウィンということで、意外にも（?）ノリノリな仮装姿を披露してくれた。あくまでクールな雰囲気は保ちつつも、背中の羽根や、花飾りがよく似合っている。



毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
10 月といえばハロウィン！ ということで、リーヴが久しぶりに衣装替えキャラクターとなって登場！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/
公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

期間限定イベント「ナハトの奮闘記 Vol.14 ユリア編」を実装！

視察のため、クロスベルに滞在しているリベール王国のクローディア王太女とユリア准佐。
とある事件がキッカケでユリア准佐の姿がスクープされ、市内は話題沸騰だ。
この状況では護衛に支障が出る……そう思っていた矢先、
ナハトとユリアはクローディア王太女から依頼を受ける。









※現在は開催終了しています

※画像は開発中のものです。 ※ 上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

女王宮を出て、エステルとヨシュアはメイド服から元の服へと着替えた。
そうして自分たちの部屋に戻ろうとしたのだが……。
「こんばんは。うふふ、こんな時間に何をしてらっしゃるのかしら？」

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡3 ～王都繚乱～



第10回

リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報
好評発売中
著　　　：はせがわみやび
イラスト：ワダアルコ
定　　価：1,400円（税別）

声をかけてきたのはカノーネ大尉だ。
城の二階、謁見の間の前だった。
緊張するエステルたちに、彼女は獲物をいたぶる獣のような眼光を向けてくる。
「いくら招待客とはいえあまり感心しませんわね。子どもが夜歩きをするには遅すぎる時間ではないかしら?」
そう言ってエステルたちに探りを入れてくる。エステルたちが女王と会っていたことを悟られるわけにはいかない。
「申しわけありません」
「じ、城内が珍しくて見物していたら、つい遅くなってしまって……」
「あら、それは結構だこと。では、半刻ほど前までどこを見物していたのかしら? 参考までに聞かせてくれませんこと?」
「えっと……」
エステルは必死に言い訳を考えた。
だが次の瞬間にはカノーネ大尉は口許に嗜虐的な笑みを浮かべていた。
「実は、つい先ほど、あなたたちがメイド部屋から出てくるのを見かけたの。あんな場所を見物するなんておかしいと思いませんこと?」
「な……!」
「……知ってて質問するなんてずいぶん人がお悪いんですね」
「うふふ、誉め言葉として受け取っておきましょう。それで、メイド部屋になんの用事があったのかしら? 正直に答えた方がよくってよ」
「それは……」
ヨシュアが口篭もった。どうしよう。このままでは潜入がバレてしまう。手伝ってくれたヒルダ夫人にも害が及ぶかもしれない……。そう、エステルが内心で冷や汗を流していたときだ。
階段の下、一階の方から声がかかった。
「おお～! エステル、ヨシュア! こんな所にいやがったかあ～!」
「ジンさん……」
「うわ、へべれけ……」
ジンは真っ赤な顔をしていた。酒に酔っているのか、足下も覚束ない様子でふらふらしていた。
「おおっと、こりゃあ失礼。誰かと思えば、ベッピンの女士官どのもご一緒でしたか。いやぁ～、このような姿をお見せしてしまって申し訳ない!」
「そ、そうですわね……」
赤ら顔でまくしたてるジンにカノーネ大尉がわずかに怯む。
「それで、どうしました? 俺の未熟な弟子どもが迷惑をおかけしましたかね?」
ジンの言葉にエステルは思わず「えっ」と声をあげそうになった。
(で、弟子って……。いつからあたしたち、ジンさんの弟子になったの?)
「いえ、彼らがメイド部屋にしばらくいたそうなので……。保安上の理由で、何をしていたのか聞

かせてもらっていたのですわ」
「ああ、そりゃあ、アレですな。ちょうど酒のツマミが無くなって取りに行かせてたんですよ！　おい、ヨシュア。なんか食えるもんはあったか？」
（って、あれ？　そんなの頼まれてたっけ？）
　エステルは素直に口にしかけ、思いとどまる。ジンの意図にようやく気づいたからだ。ヨシュアが咄嗟に口裏を合わせる。
「いえ、もう料理人の方々は帰ってしまったみたいで……。侍女の方に聞いたんですけど、すぐに用意できるようなツマミのたぐいは無いそうです」
「はあ、仕方ねえな。ツマミ無しで我慢するか……」
　肩を落としたジンが不意に顔を上げるとカノーネ大尉にくわっと目を向けた。
「おっと……いいことを思いついた！」
　カノーネ大尉へ一歩近づく。
　自分よりも頭一つ高い大男に迫られて、カノーネ大尉はびくっと肩を震わせた。
「よかったら俺と酒に付き合ってもらえませんかねぇ？　わはは、美人の笑顔は最高の酒の肴といいますしなぁ！」
「に、任務があるので遠慮させていただきますわ！」
　大男から一歩距離を取ると、カノーネ大尉はエステルたちのほうを忌々しげに睨みつけた。
「先ほどの一件は不問にいたしますけど……。今夜は、もう部屋に戻ってこれ以上出歩かないことね。

不審な行動をした場合、取り調べさせてもらいますよ」
　背中を向けて去っていった。
　部屋に戻り、そう言ったジンの顔からすっと赤みが消えていった。
「やれやれ……。どうやら上手いこと、ごまかせたみたいだな」
「ジンさん、酔ってたんじゃないの⁉」
　驚くエステルにジンはあっさりと告げる。
「ありゃ、演技だ演技。酒なんざ一滴も呑んでないぜ」
「うそ⁉　だって顔だって赤かったし……」
「気を巡らせて血行を良くして酔ったように見せかける……。東方武術における、気功というものじゃないですか？」
　ヨシュアが言って、ジンが感心したようにあごを撫でた。
「ほう、そんなことまで知っているとは驚きだぜ。まあ、困ってたみたいだから、ちょいと口出しさせてもらった。どうだ、助かっただろう？　それで、どうだったんだ？」
「え、どうだったって、何が？」
「決まってるだろう。女王陛下との会見のことさ」
　エステルはすぐにはジンの言葉の意味が判らなかった。だって、それってつまり――
「あ、あんですって～⁉　ど、ど、どうしてジンさんが⁉」
「もしかして、支部のエルナンさんから何か聞いていたんですか？」

「受付の兄ちゃんからは何も教えてもらってないぜ。まあ、カマをかけさせてもらったというところかねぇ」
「カマって……」
「なんの情報もなしに、そんな推測はできませんよ。ジンさん、あなたは何を知っているんですか？」
ヨシュアが真剣な目でジンを見る。ジンは、ふっと笑った。
「ようやく、コイツをお前さんたちに見せられるな」
そう言ってジンが懐から取り出したのは一通の手紙だった。

拝啓、ジン・ヴァセック殿。
ご無沙汰しているがお元気だろうか。急いでいるので、ざっくばらんな書き方になることを許して欲しい。実は、猟兵団がらみの事件で帝国方面に向かうことになった。しかし、リベール国内でも妙な勢力が動き始めているらしく、若手だけに任せるのは少々心許ない。
そこで君に頼みがある。
私の留守中、リベールに来て何かあったら若い連中を助けてやってもらえないだろうか？
君はリベールは初めてだろうから物見遊山しながらでも構わない。女王生誕祭の前には、外国人も参加できる武術大会も開かれるから、良いカモフラージュになるだろう。突然の話で戸惑われると思うが、もし手が空いていたらお願いする。
女王生誕祭までには戻るので、その時にはまた、一緒に呑もう。

カシウス・ブライト

「父さんの……手紙!?」
「こっちの追伸に僕たちのことが書いてあるよ、ほら」
ヨシュアが手紙の二枚目を渡してくる。

追伸
もしかしたら私の娘と息子に会う機会もあるかもしれない。遊撃士の見習いをやっているのでその時は遠慮なく鍛えてやってくれ。少々の事なら、手を貸さずに自分の力で切り抜けさせてほしい。

「こ、これって……」
「ジンさんは、父に頼まれてリベールに来たんですか」
「まあ、そういうことになるな」
「いつ、僕たちが、父の子どもだと？」
「最初に会った時からだ。エステルが棒術具を持ってたから、なんとなくピンと来てな……」
「……最初って、あの街道で会ったとき？」
「ああ。で、支部のキリカに聞いて確信したわけだ」

エステルはジンと初めて会ったときを思い出した。そう、確かにジンは言っていた。『またな』と。あのときから、エステルたちの前にいつかまた姿を現すつもりだったのだろう。

そしてジンは、昔世話になった父への恩返しをしたいと告げた。それを聞いて、エステルたちもすべてを話すことにしたのだ。もう自分たちだけでなんとかできるような話ではない。あまりにも大きな事件である。

エステルたちは、ラッセル博士の依頼でアリシア女王に面会したこと、囚われたクローディア姫を救出する依頼を請けたことを話した。

ジンは頷き、協力を申し出てくれた。

こうして、改めてジンの協力を得られることになったのだ。

夜が明けるまで、エステルたちはこれからの行動について話し合った。

「まずは支部に報告することだな」

人質奪回作戦には王都にいる遊撃士たちの協力を得る必要がある。

ジンはそう断言したのだった。

†　†　†

翌朝――城を辞してすぐ、エステルたちは動いた。

遊撃士協会の支部へと向かう。

受付のエルナンに、エステルたち――エステル、ヨシュア、ジンの三人は、昨日までの経緯を報告した。

「状況は理解できました。エステルさん、ヨシュアさん。本当によくやってくれました。まさか、女王陛下直々の依頼を請けてきてくださるとは……」

「あはは、運が良かっただけよ」

エステルは言った。

女王宮の偵察のときにたまたま外に出てきたヒルダ夫人と出会えたこともそうだ。幸運が助けてくれた。自分たちの力だけでは、どうにもならなかったろう。

「女王陛下のご不調も大佐の流したデマだったのだな」

「はい。少しお疲れの様子でしたけど、お元気でした」

身内が人質になっているのだ、心労も嵩んでいるだろう。だがリシャール大佐は、女王宮にいる限りはアリシア女王自身をどうこうするつもりはないようだった。となると……。

「やはり囚われている人たちの救出が最優先でしょうね」

エルナンの言葉に、ジンも頷く。

「気を引き締めてかからないとね」

ヨシュアが言って、エルナンが一つ咳ばらいをしてから居住まいを正した。

「私も覚悟を決めました。これより遊撃士協会・王都支部は緊急体制に移行したいと思います」

「き、緊急体制って……」

物々しい物言いにエステルは覚悟していたとはいえ緊張してしまう。
「なんと言っても国の代表たる女王陛下直々のご依頼です。規約第三項の『国家権力に対する不干渉』の枷はこの時点で無くなるのです」
とはいえ、とエルナンは言葉を続ける。
「それでも軍と遊撃士協会では根本的な戦力が違いすぎます。ジンさんはもちろん、王都にいる他の遊撃士たちにも協力していただきましょう」
ジンの見込んでいたとおり、エルナンも遊撃士たちを総動員させる必要性を感じたようだ。
「たしかに、情報部とケンカするならそのくらいの戦力は欲しいわね」
「それでも少なすぎるくらいだぜ」
「ええ。できれば、他の国内支部にも協力してもらいたいのですが……。今日になって、関所や飛行船の発着場が軍によって完全に封鎖されました。テロリスト対策という名目です」
「ええっ⁉」
「実質上の戒厳令ですね……」
それは例え遊撃士であってもリベール王国内を自由に動き回れなくなるということだった。
「いよいよ、敵さんの動きも本格化してきたってことだな」
「我々の動きを封じるつもりでしょう。人質救出は、王都内の戦力だけで行うしかありません」
「正直、きつそうだけど、やるっきゃないわよね！」
ここまできたらエステルにだって引く気はない。

「ではさっそく、エステルさんたちはホテル・ローエンバウムへと向かってください。そこにクルツさんたちのチームがまだ滞在しているはずです」
「あ、カルナさんたちね！」
ルーアンの支部で出会った赤いバンダナの彼女はそういえば武術大会に出るために四人で王都に来ているのだった。あの四人ならば腕前は大会で見て知っている。充分だ。
支部の建物を飛び出したエステルたちはホテル・ローエンバウムへと向かう。
幸いホテルに彼女たち四人はまだ滞在していた。
だが、エステルたちが事情を話しているとき、彼らに異変が起きたのだ。

† † †

四人のリーダーであるクルツに、これまでの事情と女王の依頼について語ったときだ。クルツの様子に変化が起こった。
「黒の……導力器？」
「そう、それを使って大佐は何かをしようとしているの」
「……あれは……夢じゃなかったのか……」
クルツの声は徐々に掠れてゆき、顔色も青ざめていった。ぶつぶつと聞こえない声で呟き始めたかと思うと、突然に膝を折ってしゃがみこみ、頭を押さえて苦しみ始める。

「ああ……あぁぁぁあああ、がああああああっ！」
カルナさんが慌てる。仲間たちも焦った顔をしていた。クルツの顔が土気色に変わっていた。今にも口から泡を吹いて倒れそう。
「ふむ。お前たち、ちょっと離れてろ」
前に出たジンがそう言ってから、ゆっくりとした呼吸を繰り返し始めた。
エステルは、ジンの背中が何倍にも大きくなったような錯覚を覚えてしまう。息を吐いて、吸って、一瞬だけ息を止めてからジンは短く叫ぶ。掌をクルツの身体に押し当てるように突き出した。
エステルに見えていた限りでは、ジンの掌はクルツの身体に触れてはいない。寸前で止めていた。
それなのにクルツの身体は吹き飛び、背後の壁に叩きつけられた。傍にいたエステルの身体さえビリビリと震える感触を覚え、思わず悲鳴を上げていた。
「なに今の……！」
「ま、時間がなかったから荒っぽくいかせてもらったぜ」
ジンは倒れたクルツに近寄り助け起こした。
「どうだい、気分は？」
「ああ……。すまない、もう大丈夫だ。全部ではないが……ようやく思い出すことができた」
ジンに抱えられ、身体を起こしたクルツが、まだ苦しそうな顔をしながら語る。
「私はカシウスさんに頼まれて黒装束の連中のことを調べていたんだ。そして、連中が運んでいた怪しげな代物を奪取した」

「怪しげなシロモノ？」
「それは、漆黒の導力器だった」
「《黒の導力器》！　あれって、クルツさんが――あっ！」
エステルの脳裏に謎の導力器に添えられていた手紙の文言が浮かぶ。小包の送り主である『K』の頭文字。あれはクルツのことだったのか！
「私は、手に入れた導力器を小包でカシウスさん宛に送った。うん、なんとかそこまでは思い出したよ……」
しかし、小包を送ったあとの記憶は靄がかかったように思い出せないという。頭が痛むのか、顔を顰め、こめかみのあたりを指で押さえている。これは……。誰かがクルツの記憶を封じた、ということなのだろうか？
思い出したのはアガットの受けた毒のことだ。あれも特殊な毒物だったと今では判っている。情報部は他にも――例えば記憶に作用するような薬とか――を開発しているのかもしれない。
すべては憶測であり、真実は未だ明らかになっていない。
だがエステルは、自らの心のなかに不気味な黒雲が湧き上がってくるような感じを抱かずにはいられなかった。

王都の地下には吹き抜けとなった巨大空間が広がっている。

端から端まで五歩もない角を切り取った四角い盤の上に二人の人間が乗っていた。
その薄い盤は支えもなく宙に浮き、浮いたまま長い縦穴を上下することができた。
それは今では失われた古代技術で作られた昇降機なのだ。
搭乗者は自らが下りてゆく地下の風景を降りながら見下ろすことができる。
淡い導力照明に照らされて見えるのは、複雑な多層構造を為す建築物群だ。重なり合うようにして存在するそれは、さながら巨大迷路のようだった。
封印区画。
そう呼ばれている。
王都の地下水路の下から謎の導力反応が検出されたとき、ラッセル博士は封印区画の最上層までは調べたが、早々にそれ以上の探索を打ち切ってしまった。
さらに下へと続くこの古代の昇降機を発見したのはリシャール大佐だ。
本来ならば王族しか近寄れない宝物庫のなかにその昇降機は存在した。
だからこそ、大佐は城を手に入れる必要があった。
女王を幽閉し、少数の部下だけを連れ、少しずつ封印区画の下層を攻略していったのだが……。

すでに計画は最終段階だ。もう遊撃士や女王陛下の親衛隊が何をしようと間に合わない。
昇降機に乗っている二人のうちの一人はリシャール大佐で、傍らには仮面の男を伴っていた。
「防衛反応はどうだ？」
「完全に沈黙しています」
「フッ……《黒の導力器（オーブメント）》の力か……。しかしこうして見ると予想以上の規模だな。ロランス少尉。探索の終わった最深部まで案内できるかね？」
「了解しました……」

すべては、リベールの栄光のために……。

リシャール大尉のつぶやきは、奈落の穴へと落ちていった。

遊撃士協会支部の二階には、王都にいる遊撃士のほぼすべてが集まっていた。
エステル、ヨシュア、ジンの三人だけでなく、カルナを含むクルツのチームの四人ももちろんいる。残りはたまたま王都に滞在していた遊撃士たち数人。これはエルナンが声をかけてくれた者たちだ。
さらに、遊撃士ではない人物も一人。
リベール通信社のドロシー・ハイアット。
なぜ、こんなところに新聞記者が？　ドロシーの存在はみなから訝しげな視線を集めていたのだが……。
「今、みなにも聞いてもらったとおりです。女王陛下のご意向に背き、このクーデターと呼ぶべき暴挙を働いているのは情報部のリシャール大佐！」
エルナンの発言に場がざわめく。
改めて言葉にされると重みが違った。
「そして、女王陛下が抗えずにいるのは姫殿下が人質となっているためです。ですから、我々の任務はまずはクローディア姫を始め、囚われている人々の解放です」
エルナンが言うと、傍らに立っていたドロシーが口を揃えた。
「お願いです～、どうか先輩を助けてください～。ああ見えて、けっこうたぶんイイ人なんです～。

ああ、もう今頃死んじゃってたらどうしよう！」
「こら、縁起でもないこと言わないの！」
「ふえぇぇえん。エステルちゃ～ん。お願～い」
「任せなさいって！　それより、ホントにナイアルってばクローディア姫と一緒なの？」
エステルの疑問に答えたのはヨシュアだ。
「間違いないと思うよ。君も覚えてるだろ、僕たちと最後に会ったとき、彼はクローディア姫のお見合いについて興味を持っていたじゃないか」
「先輩ってば言ってました。『こりゃ、本人に確かめてみるっきゃないな』って。で、飛び出していったきり、もう三日も連絡がなくて……」
「三日、ですか……。僕たちは三日前と二日前にナイアルさんと会ってます」
三日前ということは武術大会本戦の一日目だ。
その日に行われた準々決勝の終わった後にエステルたちはナイアルと再会した。さらに次の日の夜――準決勝の終わった後にも会って、そこで彼からリシャール大佐やロランス少尉についての情報を得たのだ。
次の日が決勝戦で。今は、さらにその次の日だから……。
「あたしたちに会ったときが行方の判っている最後っていうことね」
あのとき、そういえばナイアルは人に会う約束があると言っていたっけ。
「そうなるね。ナイアルさんのことだから、独自の情報経路を辿ってクローディア姫と面会まで漕

ぎつけたんだと思う」
「そして大佐の陰謀に巻き込まれた……」
ヨシュアが頷いた。
目の前にいる遊撃士たちを見渡してエルナンが告げる。
「みなさん聞いてください。人質の囚われている場所としてもっとも怪しいのはエルベ離宮だと思います。クーデターの前日までクローディア姫がエルベ離宮に滞在していたことは女王陛下の言葉によって確認されています」
「しかし、離宮を攻略するとしたら、役割分担はどうするつもりだい?」
カルナが疑問を投げかけ、すかさず脇のクルツが答える。
「陽動班と突入班の二手に分けるのが確実だろう。なんらかの騒ぎを起こして離宮にいる戦力を引きつけてから、そのスキに別動隊が突入する」
「しかし、相手は王国軍の中でも精鋭にあたる情報部の特務部隊だ。理想を言えば、陽動時の要撃班と突入時の撹乱班も欲しいところだな」
ジンが意見を差し挟む。
さすがは熟練の遊撃士たちである。あまりに手早く作戦をまとめていくのでエステルの頭の理解が追いつかない……。
エステルはヨシュアに耳打ちした。
「えっと。どういうこと?」

「陽動して追いかけてきた敵を待ち伏せして叩くのが要撃班。敵を混乱させて、突入をやりやすくするのが撹乱班だね」
「なるほど……。でも、この数じゃあ、そんな役割分担は無理じゃない?」
集まった遊撃士の数は十数人であって、精々分けられて二つか三つだ。四つの部隊を作るだけの人数はいない。
「ええ……残念ながら。せめて倍の人数が欲しいところだった。エルナンが肩を落とした。
「他の支部にも連絡したのですが、戒厳令下で他の遊撃士たちは、こちらに来れない状況です」
「そっか……。こういう時に、シェラ姉やアガットがいてくれたらな……」
シェラ姉はもちろん、アガットもああ見えて頼れる遊撃士である。
「ですが、ジンさんの言うとおり、陽動と突入の二班だけではあまりにも危険が大きすぎます。何か別の案を検討した方がいいかもしれません……」
ヨシュアが言ったときだった。
「いや、足りない戦力は我々が補わせていただこう」
声は下の階――一階のほうから聞こえてきた。鍵はかけていたはずだが……。
一人のシスターが階段を昇って姿を見せた。
「あ……!」
「ユリアさん……!」
「おお、森林道で会った、あの時のシスターじゃないか」

シスターに変装したままの姿だったが、部屋に入ってくると黒いベールを取り去った。
「王室親衛隊、独立中隊長のユリア・シュバルツ中尉だ。我々の部隊の少なくない人数が王都に潜伏している。彼らに動いてもらうことができるだろう。あなた方の作戦にわれら親衛隊も協力させてほしい」
全員の視線を受けとめて彼女は凛々しく告げたのだった。

†　†　†

ユリア中尉がみなを前にして口を開く。
「まずは陽動だが……これは我々親衛隊の隊員が担当しよう」
ユリアたちは指名手配されている身だ。彼女たちが現れれば陽動には効果的だった。
「陽動班を追ってきた部隊は、要撃班が返り討ちにするってことね？」
「ならば、要撃班は私たち遊撃士が引き受けた方がよさそうだな」
遊撃士は魔獣を退治する任務も多いため、森のなかでの待ち伏せには慣れている。
「攪乱班は、陽動班と同じく親衛隊の者たちが務めよう。同じ理由で特務兵たちの注意を引きつけられるはずだ」
ユリア中尉の提案に頷きつつ、エルナンが顔をエステルに向けた。
「あとは離宮の奥へと突入する者たちだが……エステルくんたちにお願いしたい」
「あたしたちでいいんですか!?」
てっきりエステルたちは要撃班になると思っていた。
だが、クルツもカルナも当然とばかりに頷いている。
「あたしたちに勝ってるだろ。このなかじゃ、あんたたちのチームが最強だよ」
「あ、あれは……」
たしかに武術大会ではそうだったけれど。
「それに女王様から依頼を受けた当人たちが行かずに誰が行くっていうんだい？」
カルナに問われ、エステルははっとなる。
「はい！　行きます！」
エステルの答えを聞いてカルナがほほ笑んだ。
入念に打ち合わせを重ねる。作戦が一度始まってしまったら、その後はもう引き返せない。
決行は夜、月が昇る前と決まった。

†　†　†

闇に紛れて密やかに進む。
大勢がまとまって行動しては特務兵たちに見つかりやすくなってしまうから、各班は別々に動い

ていた。
エルベ周遊道には兵士たちが見回っている。隠密が求められる行動だった。
森の奥、エルベ離宮からやや離れた位置に小さな公園があり、離宮に突入する前に、そこで一度集合する手はずになっている。
エステルたちが辿りついたときには、ユリア中尉の率いる親衛隊員もすでに到着していた。総勢八名。それだけの人数がよく王都に潜入できていたと驚いてしまう。ユリアによれば市井のなかに協力者も多いとのことである。親衛隊がそれまでに築き上げた信頼の力というわけだ。
「よし……。エステル君。号令をお願いしたい」
全員の準備が整うのを確認してクルツがエステルに告げてきた。
「え……？　あ、あたしが⁉」
「言っただろ、君たちが請けた女王陛下直々の依頼だって」
「我々は手伝いだ。異存はまったくないよ」
ユリア中尉からもそう言われては観念するしかなかった。
「エステル、自信を持って」
「細かいことは考えるなって。こういうのはノリさ、ノリ」
ヨシュアとジンの言葉に背中を押されて、エステルは覚悟を決める。そうだ。本番はこれからだ。こんなところで怖じ気づいてはいられない！
深呼吸を一つする。

エステルは顔をあげた。
「全作戦要員に告げる。これより、エルベ離宮攻略、および人質救出作戦を開始する！」
大声をあげるわけにはいかないから、声はささやくようにだったけれど、震えずにどうにか最後まで言いとおせた。
（みなを励ませるように言えたかな……）
応、と。
全員がエステルの号令に頷きを返したのだった。

† † †

ユリア中尉の率いる陽動隊が作戦を開始した。
夜闇が濃くなる深夜を待って、離宮の近くにいる見張り兵に奇襲をかけたのだ。
その際に、二名の見張りのうちの片方はわざと逃がした。昏倒させた兵士をその場に放置し、もう片方の兵士が味方に向かって声を張り上げるまで待つ。
それから合流される前に気絶させる。
兵力を削がねばならないのだから、殺さないとしても気絶くらいはしてもらわねば敵は増える一方になってしまう。
離宮に詰めている特務兵たちの注意を、森の奥へと引きつけるのが陽動隊の役目だった。

そうして引き寄せた兵たちを、森に隠れていた要撃班が一人ずつ魔法（アーツ）や当て身で昏倒させてゆく。
状況はわずかの間にも刻々と変化してゆく。
森の奥に隠れている敵に対応するために特務兵たちの一団にも新たな動きが生まれた。
彼らは離宮の庭に放していた軍用犬たちを集め、森に放ったのだ。
犬たちの吼える声と戦いの物音が夜の静寂を壊して森に木霊している。
戦いはますます激しさを増していった……。

「まだけっこうな人数がいやがるな……」
壁沿いに離宮のなかの気配を伺いながらジンが言った。
「ここからは私たちの出番だな」
「頼みます」
ヨシュアがユリア中尉に頭を下げる。
ユリア中尉の率いる四人組が壁に沿って走りだした。彼らが目指すのは南門だ。門を破り、正々堂々と侵入する。
離宮の内側にいる特務兵たちは森の奥での騒ぎが陽動だったと気づくだろう。ユリア中尉たちの班こそが本命だと思い、そこに戦力を集めようとするはずだ。
「でも、それも陽動ってわけね」
「戦力を二つに分けるのは賭けでもあるんだがな。とはいえ、撹乱部隊がいた方が俺たちの突入そ

のものは楽になるはずだ。行くぜ！」
ジンが両手を組んで離宮の壁を背にする。
ヨシュアがジンに向かって走り出した。ジンの組んだ掌に向かって飛ぶ。
「ハッ！」
掛け声とともにヨシュアが踏みつけた両手をジンが力いっぱい振り上げた。闇のなかをヨシュアの身体が大きく舞う。
壁の向こうへと姿が消えた。
ヨシュアの後を追って細い鋼の糸がひゅるりと壁を越えていく。
ピン、と張った。
鋼の糸を触っていたジンが「知らせ」を受け取る。小さく二回、壁の向こう側でヨシュアが糸を引いたのだ。それは見つからずに潜入したという知らせであり、糸の端をどこかに結び付けた合図でもある。
「先に行っていいぜ」
「うん！」
細い糸を手掛かりにしてエステルは壁を昇る。後ろからジンが腰を持ち上げてくれたので、楽に上まで辿りつけた。
一気に内側へと飛び降りる。すぐに後を追ってジンが落ちてきた。
南門のほうから戦いの音が聞こえてくる。ユリア中尉たちの撹乱部隊が注意を引きつけてくれて

いる。
「よしよし……やってくれてるようだな。この隙に建物に突入するぞ」
　ジンの合図でエステルたちは宮殿への侵入を開始した。

† † †

　まずは捕まっている人々の居場所を突き止めなければならない。
　だが、エステルたちには宮殿の内部がどうなっているのかを事前に知るすべはなく、しらみ潰しで部屋を回るしか方法がなかった。
　特務兵たちは屋敷のなかにも配置されていたが、思ったよりも数が少ない。陽動部隊のおかげだろう。
　潜入の途中でエステルたちは離宮で働く執事と出会い、彼から内部の情報を聞くことができた。
　その執事はナイアルの友人であり、彼が会おうとしていた人物だった。
『ナイアルのやつ、ここに保護された姫様にインタビューしたがってね……。あまりに熱心だから断れなくてなかに入れる手引きをしたんだよ』
　しかしナイアルは侵入がバレて捕まってしまった。
　その時になって執事の彼は真相に気づいたのだという。テロリストに狙われているから保護されていた、と聞かされていたが、本当は特務兵の連中に監禁されていたのだと。

　捕まった人々は、建物の一番奥にある《紋章の間》に集められていると彼は教えてくれた。条約の調印などに使われる、由緒正しい大広間だという。
　行く手を塞ぐ特務兵たちを次々となぎ倒し、エステルたちは《紋章の間》へと辿り着いた。
「みなさん、ご無事でしたか！」
　扉を開け、エステルは囚われた人々へと声をかける。
「遊撃士のエステル・ブライトです。救出にきました！」
　広間には複数の人物がいた。その中でもっともよれよれな格好をした男が、扉を開けて現れたエステルたちを見て最初に声を上げた。新聞記者のナイアル・バーンズだ。
「お、お前ら……!?」
「やっほー、助けに来たわよ！」
「ナイアルさん。無事だったみたいですね」
　さらにドレス姿の少女が近づいてきた。長い髪をしていて楚々とした振る舞いをする少女である。
　彼女がクローディア姫なのだろうと見当がついた。
（よかった。無事だったんだ！）
　けれども彼女は近づいてくるなり、こう言ったのだった。
「エステルさん、ヨシュアさん。こんな所で会えるなんて。やっと約束どおり再会できましたね」
「え……」
　エステルは目の前の少女をまじまじと見つめた。

こんな風に姫様に親しげに声をかけられる理由なんて……と考えてから、ようやっと彼女の顔と、友人の顔が結びついた。髪がもっと短ければこの少女はまさに――。
「ああっ、クローゼじゃない！」
騙し絵に気づいたときのようだ。気づいてしまえば、見間違いようもなかった。
クローゼ・リンツ。ルーアンの孤児院で出会った少女。ジェニス王立学園の学生であり、エステルやヨシュアとともに学園祭の劇にも出た。
「もう、エステルさんったら。すぐに気づいてくれないなんてヒドイです」
「そ、そんなこと言われてもドレス着て、髪伸ばしてるし。一体全体、どうしちゃったの？　なんでこんな所に……あ、そうだ、ねえ、クローゼ、この部屋にお姫様がいるはずなんだけど、知らない？」
目の前の少女が姫様ではないと判り尋ねたのだが、クローゼは苦笑を返してきた。
「目の前にいるだろうが」
そう言ったのはナイアルだ。
「その方が、陛下の孫娘、クローディア姫殿下だっての」
「…………え？　…………………………………ええええええええええっ!?」
「ごめんなさい、黙っていて……。エステルさんたちには、王都で再会した時に打ち明けるつもりだったんですけど、情報部に捕まってしまって……」
「え、でも、なんで？　なんでお姫様が正体隠して普通の学校なんかに……!?　そ、それにあたし、じゃあ、クローゼのことをどう呼んだらいいの……」
「どうかそのままクローゼと呼んでください」
混乱するエステルにクローゼは言った。
「クローディア・フォン・アウスレーゼ……。本名の最初と最後を合わせてジルが付けてくれた愛称なんです」
「えっ、じゃあ、ジルも知ってるの？」
「はい。それにもちろん学園長も」
「そうだったんだ……」
長い髪はヘアピースであるらしい。
新聞記者であるナイアルにもルーアンの市長邸で会っているにも関わらず気づかれなかったし、ダルモア市長やデュナン公爵にもバレていなかったとクローゼは少しだけいたずらっぽい笑みを浮かべながら言ったのだった。
今までどおりに接して欲しいと言われ、エステルは気持ちを切り替えた。今は驚いている余裕もないわけだし。エステルはクローゼにこれまでの経緯をひととおりと、アリシア女王の依頼で救出に来たことを説明する。
「そうだったんですか……。エステルさん、ヨシュアさん。それにジンさんと仰いましたね。助けに来てくださって本当にありがとうございました」
「気にしないでよ。捕まってたのがクローゼだと知ってたら頼まれなくても助けに来たし」

「それに、僕たちよりも陛下に感謝した方がいいと思うよ。自分の身をかえりみず、君の救出を依頼したんだから」
「ああ。姫殿下が無事だったら陛下は大佐の要求を拒否し続けるだろう」
死すら覚悟の上で、とジンが言った。
「はい……。お祖母さまはそういう方です。早くなんとか手を打たないと今度はお祖母さまの身が……」
「茶番はそのくらいにしてもらおうか」
敵意のある声が響いた。
いつのまにか広間の入口に特務兵の男たちが現れていた。
二人いて、手前の男が上官のようだ。
小さな女の子を捕まえて、人質にしている！　エステルの胸の内に怒りがこみあげてくる。
「お、お姫さまぁ～」
「リアンヌちゃん!?」
クローゼが悲鳴をあげた。クローゼの様子からすると、王室の関係者なのかもしれない。
「ただの脅しと思うなよ！　我ら特務兵、理想のためなら鬼にも修羅にもなれる！」
「そ、そんなことで威張ってるんじゃないわよ！」
しかし人質がいては下手に動けないのは確かだった。エステルの心に焦燥感がつのる。棍を握る手に力が入った。

（こんなやつらに負けたくないのに……）
「そろそろキルシェ通りから巡回部隊が戻ってくる頃合いだ。親衛隊、遊撃士もろともここで一網打尽にしてくれるわ！」
上官の男が言ったときだ。
「あー、それは無理ってもんね。ここに来る時に、あたしたちが倒しちゃったから」
声が終わる前に特務兵たちの背後から宙を黒い線が走った。
「ぎゃっ」
リアンヌを拘束していた特務兵が悲鳴をあげて倒れる。
銀の髪をなびかせた人影が、すれ違いざまにリアンヌの身体を抱え、そのまま広間に飛び込んできた。
褐色の肌の女性だ。こちらに向かってパチッとウインクしてみせる。
「エステル、ヨシュア。ずいぶん久しぶりじゃない」
「シェ、シェラ姉!?」
視界をよぎった黒い線はシェラザードの鞭だったのだ！
「来てくれたんですか……」
ヨシュアがほっとした声を出した。
「くっ！　きさまらぁ！」
上官の男が武器を構えた。カタールと呼ばれる湾曲した刃をもつ剣だ。だが、男がその武器を振

るうことはなかった。
背中から飛来した光弾が彼の意識を刈り取ったからだ。
「いやいや、真打ち登場といった所かな？」
飄々とそう言いながら入ってきたのはオリビエだった。
（って、ほんと、どこにでも現れるわね！）
「はは、つくづく突拍子もない兄ちゃんだな」
ジンも苦笑いを浮かべていた。
「でも、シェラ姉ってば、どうやって王都まで来たの？　街道は封鎖されていたはずじゃ……」
助けだされ、クローゼに抱きついたまま泣きじゃくるリアンヌを見て、安堵の息をつきつつもエステルは首を傾げた。
「ヴァレリア湖をボートを使って移動したのよ」
「なるほど。今は飛行船が発達してしまったから、湖を船で行き来することがなくなりましたが……逆にそれが彼らの盲点になったわけですね」
ヨシュアが感心していた。
「そういうこと！　で、協会の支部に行ったら、そこのスチャラカさんと出くわしちゃってね」
「ハッハッハッ！」
胸を張って恰好をつけているオリビエをジト目で見つめていると、扉がふたたび開いてユリア中尉が飛び込んできた。後を追うようにして白ハヤブサのジークがやってきて肩にとまる。
（そうか、ひょっとしてジークが陛下やクローゼに手紙を運んで……）
エルベ離宮にクローゼがいることを女王陛下が把握していた理由はこれか――。
ユリア中尉が、離宮は完全に奪還したと告げると、部屋のなかに閉じ込められていた人々から歓声があがった。

† † †

同時刻――。
グランセル城。王城の謁見の間。
「ど、どういうことですの!?　エルベ離宮との連絡が途絶えてしまっただなんて！」
ヒステリックな声をあげるカノーネ大尉に答えたのはロランス少尉だ。
「親衛隊か遊撃士協会、どちらかに攻め落とされた可能性があるということだろう」
謁見の間には他に数名の特務兵が控えていた。彼らはカノーネ大尉直属の部下たちだ。微動だにせず、上官からの指示を待っている。
「ぬ、ぬけぬけと……。連中を指揮していたのは少尉、あなたでしょうに！」
「これは面目ない。だが、済んでしまったことを、とやかく言っても詮無きことだ。この上、陛下まで奪われぬよう、城の守りを固めるべきだろうな」
「い、言われなくとも判っていますわ！」

カノーネ大尉は、控えている特務兵たちに告げる。
「城門を完全に封鎖！　誰が来ても入れないように。誰が来ても、です！　以後は、空からの襲撃にのみ備えることにしなさい！」
「了解しました！」
特務兵たちは統制のとれた動きで命じられた役割を果たすべく謁見の間から出て行く。
「ふふ、見事なお手並みだ」
「フン、当然でしょう。新参者のあなたとは違います。閣下の留守はわたくしが絶対に守りますわ！」
「それがいい。王城が彼らに奪い返されたら大佐の大望も潰えてしまいかねない」

†　†　†

エルベ離宮、紋章の間。
部屋のなかには捕まっていた人々と作戦に加わった全員が揃っていた。
エステルとヨシュアとジン、シェラとオリビエ、ユリアたち親衛隊と遊撃士の先輩たちも合流している。
その中心で、クローディア姫――クローゼが全員を見まわし、願いを口にした。
「皆さん……。無理を承知でお願いします。王城の攻略と、陛下の救出を手伝っていただけないでしょうか?」

拒否するものは誰もいない。女王陛下を助けたい思いは共通だ。
人質を救いだした今、それは次なる目標でもある。
しかし、王城の特務兵たちは城門をすでに固めているだろう。乗り込むとなると、ここにいる全員の力を集めても真正面からでは不可能だと思われた。堅牢な城を攻め落とすには戦力が足りなさすぎる。
しかもこれだけの騒ぎを起こしたあとだ。城にいる特務兵たちにもなんらかの方法で離宮奪還の情報が伝わっていると思っていたほうがいい。
特務兵たちが使用していた飛行艇を奪うことができたとはいえ、数名が乗れる程度の船を確保できたくらいではとても戦力が増したとは言えない……。
打開するための何か作戦が必要だった。
「そもそも、かつての戦争にさえ耐え抜いた城門の堅牢さはみなも知っての通り。あれをこじ開けないことには……」
「それについて、私に考えがあります。これを見て頂けますか?」
クローゼが取り出したのは一枚の地図だった。
「これって……どこの地図?」
「王都の地下水路の内部構成を記した古文書です。離宮の書庫の奥に秘蔵されていたものを持ってきました。これに、王城地下に通じる隠し水路の存在が記されています」
クローゼの言葉を聞いたシェラが確認するように問いかける。

「敵の知らない進入口ってわけね」
「はい。この通路を使って忍び込めば……」
「なぁるほど、そいつらに城門の開閉装置を開けてもらおうって作戦か」
　厳しいことに変わりはないが光明が見えた。

†　†　†

　飛行艇の機関部があげる絶え間ない震動を感じている。
　眼下にはエルベ離宮を包み込む森が黒々とした染みのように広がっていた。
　この森を越えればもう王都の明かりが見えてくるはず。
　つぶやきが夜の森に零れ落ちる。
「情報部の特務艇……こんな形で乗るなんて」
　この艇に《紅蓮の塔》で砲撃されたのが、ずいぶん昔のことのように思えた。
　操縦桿を握るのはクローゼだ。小さな飛行艇だから、乗っているのはエステルとシェラザード、そしてクローゼの三人しかいない。
（ヨシュアは大丈夫かな……）
　離宮を奪回したときのように今回の作戦も幾つかの班に分かれている。
　作戦の要である隠し水路から潜入して城の門を開ける役目はヨシュアたち三人――ヨシュア、ジン、オリビエに任されていた。エステルとしてはヨシュアと分かれての行動は久しぶりである。妙な胸騒ぎがしてしまうのは気が昂ぶっているからだと思いたかった。
　正面の窓から眼下に王城が見えた。
「城門が開いてるわ！」
「ヨシュアさんたち、やりましたね！」
「陽動もどうやらうまくいっているみたいね」
　シェラ姉が言った。
　すでに城門前で戦いが起こっている。
　ユリアたち親衛隊による挑発で城門のほうへと兵士が集まり、エステルたちが目指す王城の空中庭園は手薄になっていた。
　飛行艇から庭園への強行着陸は小型艇ならではの作戦であり、今が絶好のチャンスだ。
「クローゼ！」
「はい！　任せてください！」
　クローゼが操縦桿を倒す。機関部がうなりを上げ、特務艇は城の空中庭園へ向けて加速した。

†　†　†

「先輩、あれ！」

ドロシーの指差す先には夜の闇に紛れてグランセル城の屋上へと近づいてゆく小さな飛行艇が見えた。

「写真、撮れるか？」

「ちょっと暗すぎですね～」

通常の飛行船ならば探照灯の一つでも点けているところだろうが、隠密の任務で飛んでいて明かりを消している上に、そもそも潜入捜査を旨とする特務隊用の小型船だ、ドロシーが気づいただけでも奇跡だった。

女王陛下救出作戦のあらましを聞いていなければ見つけられなかっただろう。

「行くぞ、ドロシー！　見晴らしのいい場所を確保するんだ！」

「ま、待ってくださいよ～！　すぐに感光クオーツをセットしちゃいますから～！」

彼らの目的はいつでもどこでも変わらない。

† † †

グランセル城内——。

「いったい誰が門を開けちまったんだ！」

罵る声がテラスに響き渡る。周りの兵士たちが思わず首をすくめた。

「大尉どの！　と、特務飛行艇が！」

見晴らしの効く王城のテラスで部下を指揮していたカノーネ大尉は、城門前の攻防戦に対して怒りを露わにしつつも、矢継ぎ早に指示を出し続けていたが、部下の声に空を見上げて唇を噛んだ。

奪われた特務艇が女王宮のある屋上庭園へと降りてくる。

「くっ、そちらが本命か⁉」

唇を噛む。カノーネ大尉の使命は彼らをリシャールの元へと辿りつかせないことだったが——。

「閣下……！」

† † †

エステルたちの乗る特務艇が屋上へと着陸した。

時刻はちょうど真夜中だ。大聖堂の鐘が鳴り響く。

エステル、クローゼ、シェラの突入組は特務艇から降りて女王宮へと乗り込んだ。

かつて一度、侍女として潜入していた経験が生きた。

「こっちよ、こっち！」

エステルの先導で三人は女王陛下がいるはずの部屋へと走る。

廊下に飛び出たところで思わぬ人物と鉢合わせした。デュナン公爵が特務兵を連れて待ち受けていたのだ。

「は、反逆者ども！　のこのこと来おったな⁉　私を新たなる国王と知っての狼藉か⁉」

エステルはため息をついた。
「冗談は髪型と髭だけにしなさいよ。あんた、まだ国王になったわけじゃないでしょ」
「な、なぬう⁉」
シェラザード――シェラがエステルの前に出て、言い放った。
「デュナン公爵閣下ね。私たちは遊撃士協会の者よ。クローディア姫殿下の依頼で女王陛下の救出に来ました。大人しくそこを通してくれると嬉しいんだけど」
「ク、クローディアだと⁉　あの小娘、余計なことをしおって！」
エステルの背後にいる少女の正体に気づいていない。
クローゼが前に出てきた。静かに言う。
「デュナン小父様……もう、止めにしましょう。小父様はリシャール大佐に利用されていただけなんです」
「おじさまだと？　な、なんだそなたは…………………………ク、ク、ク、クローディアではないか！　なんだその髪は⁉　その恰好は⁉」
クローゼが悲しそうな顔をしていた。たしかにルーアンでも顔を合わせているのだけど。そして、そのときも気づいてなかったのだけど。
「わ、私を謀ったか。これだから女というのは信用ならんのだ！　やはり国を預かるには――」
公爵のその言葉にカチンときた。
「あんですってえ……」

エステルは自分でも驚くほど低い声が出た。
「…………ふうん？」
シェラの視線も真冬の氷のごとき冷たさだ。
「あ、う……いや……」
「小父様……今のはその……弁解できないかと」
「だ、黙れ黙れ黙れ！　ええい、こいつらはまとめて反逆者だ！　引っ捕らえろ！」
デュナン公爵が後ろに下がり、代わって彼の両側に控えていた特務兵が前に出てきた。
狭い廊下での戦いになった。
「行きます！」
前に出ていたクローゼがそのまま突進する。腰のレイピアを抜くと、向かって右側の兵士に向かってまっすぐに突きを繰りだした。応戦する兵士はその突きを身体を捻って躱そうとする。
そこにすかさずシェラの鞭が跳んだ。鞭の先端が、蛇の鎌首のように体勢を崩しかけた兵士の首元に迫る。
避けようとしてさらに体勢を崩すことになった。
狙いすましたクローゼの二度目の突きが兵士の剣を握る腕を切り裂く。
「ぐぁ！」
剣が落ちた。床にぶつかる鋼の音が響き渡るよりも早く、クローゼはその剣を廊下の奥へと蹴り飛ばしていた。

「この、小娘！」
左側の兵士がクローゼに剣を振るう。
「っと！　あんたの相手はあたしよ！」
割り込んだエステルの棍が剣を受け止めた。幅広の剣（ブロードソード）の重みが棍を通してエステルの腕にのしかかってくる。
だが旅を始めた頃ならばいざ知らず、今のエステルはこの程度では！
「せいっ！」
剣を押し返してから、すかさず懐に飛び込む。自分の身体を軸として風車のように棍を振り回した。
「やああああ！」
旋風輪！
ふっとばされた兵士が壁に打ちつけられて、そのまま廊下に崩れ落ちた。
「って、あ……」
吹き飛ばした特務兵の下敷きになる形で、デュナン公爵も気を失っていた。
「あちゃー……どうしよう。ごめん、クローゼ」
「いえ、エステルさんのせいでは……」
「出来れば特務兵だけ倒したかったけれど。まあ、邪魔したのは事実だし、いい薬になったんじゃない？」

シェラがあっさり言った。
「ただ、気絶した小父様をこのままにしておくわけにも……」
「こ、公爵閣下⁉」
扉を開けて忠臣の執事であるフィリップが現れ、公爵に駆け寄った。
フィリップはエステルたちに気づくと深々と頭を下げてくる。
「エステル様、それにクローディア殿下！」
執事のほうはあっさりクローゼの正体を見抜いたようだ。
「この度は、わが主が迷惑をおかけして申しわけありません！　すべては閣下をお育てした、わたくしの不徳の致すところ……。どうか、これ以上の罰はわたくしめにお与えくだされ！」
「ちょ、ちょっと待ってよ！　あたしたちはべつに……」
「フィリップさん、どうか頭をお上げください。私たちは、お祖母さまを……、陛下をお助けしに来ただけです。もとより、小父様に何もするつもりはありません。どうか、小父様の手当てをしてあげてください」
クローゼが言った。フィリップは顔を上げて瞳を潤ませる。
「本当にありがとうございます。このご恩、決して忘れませんぞ！」
エステルにとって、デュナン公爵はお調子者の嫌味な貴族というイメージしかなかった。けれど、この執事にとってはそうではないのだ。
ひとりひとりに固有の人生があり、みな、抱える想いは異なりながらもそれぞれが懸命に生きて

いる……。
公爵を担ぎあげるフィリップを背にし、エステルたちはその場を後にした。
女王の間は、もうすぐそこだ。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.129

発行人　田中一寿

発行協力　日本ファルコム株式会社

編集　小渕智幸
河野崇

デザイン・DTP　株式会社 ACQUA

表紙ロゴデザイン　荻窪裕司（デザインクロッパー）

発行　株式会社フィールドワイ
〒 101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/